

# 桜の園

——喜劇 四幕——

アントン・チエーホフ

青空文庫



## 人物

ラネーフスカヤ（リュボーフィ・アンドレーエヴナ）〔愛称リユーバ〕 女地主

アーニヤ その娘、十七歳

ワリーヤ その養女、二十四歳

ガーエフ（レオニード・アンドレーエヴィチ）〔愛称リヨーニヤ〕 ラネーフスカヤの兄

ロパーヒン（エルモライ・アレクセーエヴィチ） 商人

トロフィーモフ（ピョートル・セルゲーエヴィチ）〔愛称ペーチャ〕 大学生

ピーシチク（ボリース・ポリーソヴィチ・シメオーノフ） 地主

シャルロツタ（イワーノヴナ） 家庭教師

エピソードフ（セミヨーン・パンテレーエヴィチ） 執事

ドウニヤーシヤ 小間使

フィールス 老僕、ろうぼく八十七歳

ヤーシヤ 若い従僕

浮浪人

駅長

郵便局の官吏

ほかに客たち、召使たち

ラネーフスカヤ夫人の領地でのこと

## 第一幕

いまだに子供部屋と呼ばれている部屋。ドアの一つはアーニヤの部屋へ通じる。夜明け、ほどなく日の昇る時刻。もう五月で、桜の花が咲いているが、庭は寒い。明けがたの冷気である。部屋の窓はみなしまっている。

ドウニヤーシャが蠟燭ろうそくをもち、ロパーヒンが本を手に登場。

ロパーヒン やつと汽車が着いた、やれやれ。何時だね？

ドウニヤーシャ まもなく二時。(蠟燭を吹き消す) もう明るいですわ。

ロパーヒン いったいどのくらい遅れたんだね、汽車は？ まあ二時間はまちがいあるまい。(あくび、のび) おれもいとこがあるよ、とんだドジを踏んじまった！ 停車場まで出迎えるつもりで、わざわざここへ来ていながら、とたんに寝すごしちゃうなんて……。椅子いすにかけたなりぐつすりさ。いまいますい。……せめてお前さんでも起して

くれりやいいのに。

ドウニヤーシャ お出かけになつたとばかり思つてました。(耳をすます) おや、もういらしたらしい。

ロパーヒン (耳をすます) ちがう。……手荷物を受けとつたり、何やかやあるからな。

……(間) ラネーフスカヤの奥さんは、外国で五年も暮してこられたんだから、さぞ変られたことだろうなあ。……まったくいい方かただよ。きさくで、さばさばしててね。忘れないが、おれがまだ十五ぐらいのガキこころだった頃、おれの死んだ親父おやじが——親父はその頃、この村に小さな店を出していたんだが——おれの面つらをげんこで殴りつけて、鼻血を出したことがある。……その時ちようど、どうしたわけだか二人でこの屋敷へやって来てね、おまけに親父は一杯きげんだつたのさ。すると奥さんは、つい昨日のこのように覚えているが、まだ若くつて、こう細つそりした人だったがね、そのおれを手洗いのところへ連れて行つてくれた。それが、ちようどこの部屋——この子供部屋だったのさ。「泣くんじやないよ、ちつちやなお百姓さん」と言つてね、「婚礼までには直りますよ(訳注 怪我をした人に言う慰めの慣用句)。……」(間) ちつちやなお百姓か。……いかにもおれの親父はどん百姓だったが、おれはというと、この通り白いチョッキ

を着て、茶色い短靴たんぐつなんかはいている。雑魚ざぎょのとどまじりさ。……そりや金はある、金ならどつさりあるが、胸に手をあてて考えてみりや、やつぱりどん百姓にちがいはないさ。……（本をばらばらめくつて）さつきもこの本を読んでいたんだが、さつぱりわからん。読んでるうちに寝ちまった。（間）

ドウニヤーシャ 犬はみんな、夜つびて寝ませんでしたわ。嗅かぎつけたんですわね、ご主人たちのお帰りを。

ロパーヒン おや、ドウニヤーシャ、どうしてそんなに……

ドウニヤーシャ 手がぶるぶるしますの。あたし気が遠くなって、倒れそうだわ。

ロパーヒン どうもお前さんは柔弱でいかな、ドウニヤーシャ。みなりもお嬢さんみた  
いだし、髪かみの格かっこう好かだつてそうだ。駄目だめだよ、それじゃ。身のほどを知らなくちゃ。

エピホードフが花束をもつて登場。背広を着こみ、ひどくギユウギユウ鳴る、ピカピカに磨みがきあげた長靴をはいている。はいつてきながら花束を落す。

エピホードフ （花束をひろう）これを庭男がとどけてよこしました。食堂に挿さすように

つてね。(ドウニヤーシャに花束をわたす)

ロパーヒン ついでにクワスをおれに持つてきとくれ。

ドウニヤーシャ かしこまりました。(退場)

エピホードフ 今ちようど明け方の冷えて、零下三度の寒さですが、桜の花は満開ですよ。

どうも感服しませんなあ、わが国の気候は。(ため息) どうもねえ。わが国の気候は、

汐しおどきにぴたりとは行きませんですな。ところでロパーヒンさん、事のついでに一言申

し添えますが、じつは一昨日いっせきじつ、長靴を新調したところが、いや真正銘のはなし、そ

いつがやけにギユウギユウ鳴りましてな、どうもこうもなりません。何を塗ったもんで

しょうかな？

ロパーヒン やめてくれ。もうたくさんだ。

エピホードフ 毎日なにかしら、わたしには不仕合せが起るんです。しかし愚痴は言いま

せん。馴なれっこになって、むしろ微笑を浮べているくらいですよ。

ドウニヤーシャ登場、ロパーヒンにクワスを差出す。



エピソードフ　どれ行くとするか。（椅子にぶつかって倒す）また、これだ。……（得意げな調子で）ね、いかがです、口幅つたいことを言うようですが、なんたる回り合せめぐでしょう、とにかくね。……こうなるともう、天晴あつぱれと言いたいくらいですよ！（退場）

ドウニヤーシヤ　じつはね、ロパーヒンさん、あのエピソードフがあたしに、結婚を申しこみましたの。

ロパーヒン　ほほう！

ドウニヤーシヤ　どうしたらいいのか、困ってしまいますわ。……おとなしい人だけれど、ただ時どき、何か話をしだすと、てんでわけがわからない。聞いていれば面白おもしろいし、情じょうもこもっているんだけど、ただどうも、わけがわからなくてねえ。あたし、あの人がまんざら厭いやじやありませんし、あの人ときたら、あたしに夢中なんですの。不仕合せな人で、毎日なにかしら起るんです。ここじゃあの人のこと、「二十二の不仕合せ」って、からかうんですよ。……

ロパーヒン　（きき耳を立てて）さあ、こんどこそお着きらしいぞ……

ドウニヤーシヤ　お着き！　どうしたんでしょう、あたし……からだじゆう、つめたくな  
ったわ。

ロパーヒン　ほんとにお着きだ。出迎えに行こう。おれの顔がおわかりかなあ？　なにせ五年ぶりだから。

ドウニヤーシャ　（わくわくして）あたし倒れそうだわ。……ああ、倒れそうだ！

二台の馬車が表口へ乗りつける音。ロパーヒンとドウニヤーシャは急いで出て行く。舞台空虚。つづく部屋部屋で、ざわめきがはじまる。ラネーフスカヤ夫人を停車場まで迎えに行った老ろうぼく僕ぼくフィールスが、杖つえにすがりながら、あたふたと舞台をよこぎる。古めかしいお仕着せに、丈の高い帽子をかぶり、何やら独りごとを言っているが、一言も聞きとれない。舞台うらのざわめきは、ますます高まる。「さあ、こつちから行きましようよ……」という声。ラネーフスカヤ夫人、アーニヤ、鎖につないだ小犬を連れたシャルロツタ、以上みな旅行服で、——それから外がいとう套とうにプラトークすがたのワーリヤ、ガーエフ、ピーシチク、ロパーヒン、包みとパラソルを持ったドウニヤーシャ、いろんな荷物をかかえた召使たち——みなみな部屋に通るかかる。

アーニヤ　ここを通って行きましようよ。ねえママ、この部屋なんだか覚えてらっしやる

?

ラネーフスカヤ (嬉し<sup>うれ</sup>そうに、なみだ声で) 子供部屋！

ワーリヤ なんて寒いだろう、手がかじかんでしまったわ。(ラネーフスカヤに) あなたのお部屋は、白いほうもスマイレ色のほうも、ちゃんと元のままですわ、お母さま。

ラネーフスカヤ 子供部屋、なつかしい、きれいなお部屋……。わたし子供のころ、ここで寝たのよ。……(泣く) 今でもわたし、まるで子供みたいだわ。……(兄とワーリヤに、それからまた兄にキスする) ワーリヤはちつとも変らないのね、相変らず尼さんみたいね。ドウニヤーシヤも、わかりましたよ。……(ドウニヤーシヤにキスする)

ガーエフ 汽車は二時間もおくれた。え、どうだい？ なんてぎまだろう？

シヤルロツタ (ピーシチクに) わたしの犬は、クルミも食べるのよ。

ピーシチク (呆れ<sup>あき</sup>顔で) へえ、こりや驚いた！

アーニヤとドウニヤーシヤのほか、一同退場。

ドウニヤーシヤ やつとお帰りになった、……。 (アーニヤの外套と帽子をぬがせる)

アーニヤ わたし途中四晩も眠れなかったの……今じやもう、ごごえあがっちゃったわ。

ドウニヤーシヤ あなたがたがお発たちになったのは、大たいさい齋さいのころ（訳注 復活祭に先だ

つ七週間の精進期間で、年によつて違ちがうが、およそ二月初めから三月初旬までの間にな  
る）で、まだ雪がふつて、ひどい凍いてつきようでしたが、今はまあどうでしょう？ 可

愛いお嬢さま！（笑つて、アーニヤにキスする）待ち遠しかったですわ、大好きな、

可愛かわいいお嬢さま。……早速ですけど、あたしお話がありますの。一分間だつて待てませ

んの……

アーニヤ （だるそうに）また、なんの話……

ドウニヤーシヤ 執事のエピホードフが、復活祭のあとで、あたしに結婚を申込みました  
のよ。

アーニヤ いつも、おんなし事ばかり……（髪を直しながら）わたし、ピンをみんな落し  
てしまったわ。……（疲れきつて、よろよろしている）

ドウニヤーシヤ どう考えたらいいか、困つてしまいますわ。あの人、あたしを愛してま  
すの、とても愛してますの！

アーニヤ （自分の居間のドアをのぞきこみ、なつかしそうに）わたしの部屋、わたしの

窓、まるで旅行なんかしなかったみたい。わたし、うちにいるのね！ あした朝おきたら、すぐ庭へ出てみよう。……ほんとに、ちよつとも寝られたらよかったのにねえ！

道中ずつと眠らずじまい、なんだかとても気にかかつて。

ドウニヤーシャ 一昨日いっさくじつ、トロフィーモフさんがいらつしやいました。

アーニヤ (嬉しそうに) ペーチヤが！

ドウニヤーシャ お風呂場ふろばで寝てらつしやいますよ、あすこに陣どつてしまつてね。お邪魔になつちや悪いからな、ですつて。(懐中時計を出して見て) あのかた、お起しするといいんですけど、ワルワラさま(訳注 ワーリヤの正式の名)がいけないと仰おつしやるものですから。お前、あの人を起すんじゃないよ、つて。

ワーリヤ登場、バンドに鍵かぎ束たばをさげている。

ワーリヤ ドウニヤーシャ、コーヒーを早く……。お母さんがコーヒーをご所望だからね。  
ドウニヤーシャ はい、ただ今。(退場)

ワーリヤ よかつたわ、みんな無事でお着うちきで。あんたも、やつとまたお家うちね。(優しく

いたわりながら）わたしのいい子が帰ってきた！　べっぴんさんが帰ってきた！

アーニヤ　ずいぶん辛つらかったわ、わたし。

ワーリヤ　察するわ！

アーニヤ　わたしがここを発つたのは、御受難週間（訳注　大齋期の第五週）で、まだ寒いころだったわ。シャルロットたら途中のべつしやべりどおしで、手品までして見せるの。なんだってあんた、シャルロットなんか付けてくれたの……

ワーリヤ　だつて、あんたひとりで旅へ出すわけにも行かないじゃないの、アーニヤ。十  
七やそこらで！

アーニヤ　パリに着いたら、あすこも寒くつて、雪だったわ。わたしのフランス語ときたら、凄すごいものでしょう。ママは五階に部屋をとっていてね、わたしがあがって行くと、誰だれだかフランス人の男だの、女だの、ちっちゃな本をもった年寄りのカトリックの坊さんだのが、つめかけていて、部屋じゆうタバコの煙でいっぱい、そりゃ厭いやなの。わたし急にママが可哀かわいそうになつて、あんまり可哀かわいそうだもんだから、ママの頭を抱かかいて、ぎゅつと両手でしめつけたなり、放はなせないの。ママはそれからいつも甘あまったれて、泣ないてばかりいたわ……

ワーリヤ (涙ごえで) もういいわ、もう言わないで……

アーニヤ マントン (訳注 南フランス、ニースに近い保養地) の近くのご自分の別荘も売ってしまったし、ママにはもう、なんにも残っていないの、なんにも。わたしだって一コペイカもなくなってしまうって、やっとこさで帰ってきたのよ。だのにママったら、ちっともわからないの。駅の食堂へはいると一ばん高い料理を注文するし、ボーイのチップは一ルーブリずつなのよ。シャルロットも同じなの、おまけにヤーシヤまでが、ちやんと一人前とるの、見ちやいられないわ。ヤーシヤって、ほら、ママのボーイよ。それも一緒に連れてきたの……

ワーリヤ 見たわ、いやなやつ。

アーニヤ で、どうなの、その後？ 利子は払えた？

ワーリヤ それどころじゃないわ。

アーニヤ 困るわね、どうしましょう。……

ワーリヤ 八月には、この領地が競売になるわ……

アーニヤ ああ、どうしよう。

ロパーヒン (ドアから覗いて、牛のなき真似まねをする) モオ・オ・オ…… (去る)

ワーリヤ (涙ごえで) ええ、こうしてやりたい…… (拳固げんこでおどす)

アーニヤ (ワーリヤを抱いて、小声で) ワーリヤ、あの人あなたに申込みをして？

(ワーリヤ、否いやというしるしに首を振る) だってあの人、あなたを愛してるのよ。……

おたがい打明けたらどうなの、何を二人とも待つてるの？

ワーリヤ わたし思うのよ、これは結局どうにもならない話だって。あの方は仕事が多いから、わたしどころじゃない……見向きもしないのよ。いつそこかへ行ってしまうてくれるといいんだけど。あの方の顔、見るのがつらいわ。みんな、わたしたちの結婚のうわさをして、お祝いまで言ってくれるけれど、ほんとうは何もありやしない。夢みないなものなのよ。…… (調子をかえて) あんたのブローチ、蜜蜂みつばちに似ているわ。

アーニヤ (悲しそうに) これ、ママが買ってくれたの。(自分の部屋へはいつて、快活な子供っぽい調子で) あたしパリでね、軽気球に乗ったわ!

ワーリヤ わたしのいい子が帰ってきた! ベっぴんさんが帰ってきた!

ドウニヤーシャは、コーヒー沸かしをもつてすでに戻もどってきており、コーヒーを煮ている。



ワーリヤ（ドアのそばに立つて）わたしね、アーニヤ、こうして一日じゆう家<sup>うち</sup>のことであくせくしながらいつも空想しているの。あんたをお金持の人のところへお嫁にやれたら、わたしも安心がいつて淋<sup>さび</sup>しい僧院にこまれるわ。それからキーエフへ……モスクワへと、ずっと聖地めぐりをして暮すの。……聖地から聖地へめぐって行くの。きつと、すばらしいわ！……

アーニヤ お庭で鳥がいない。今なん時？

ワーリヤ とつくに二時は回つたはずよ、もう寝たらいいわ、アーニヤ。（アーニヤの部屋へはいりながら）きつとすばらしいわ！

ヤーシヤが、膝掛<sup>ひざか</sup>けと旅行用の信玄袋を持って登場。

ヤーシヤ（舞台を横ぎりながら、いんぎんに）こちらを通つても宜<sup>よろ</sup>しいでしょうか？  
ドウニヤーシヤ まあ、見ちがえるようだわ、ヤーシヤ。あんた、外国ですっかり立派になつて。

ヤーシヤ ふむ。……どなたでしたっけ？

ドウニヤーシヤ あんたがここを発つた時は、あたしまだこんなだったわ……（床からの高さを手で示す）ドウニヤーシヤよ、フョードル・コゾエードフの娘よ。覚えていないのね！

ヤーシヤ ふむ。……可愛いキュウリさん！（あたりを見回し、彼女を抱く。彼女はキヤツと叫んで受け皿さじらを落す。ヤーシヤすばやく退場）

ワーリヤ （ドアの敷居で、不興げな声で）また何かしたの？

ドウニヤーシヤ （涙なみだごえで）お皿を割りました。……

ワーリヤ そりゃいい前兆ね。

アーニヤ （自分の部屋から出てきながら）ママに言つとかなくちやいけないわ、ペーチヤが来ているって……

ワーリヤ わたし、あの人を起さないように言いつけたの。

アーニヤ （考えこんで）六年まえに、お父さまが亡なくなって、それから一ひと月つきすると弟のグリーシヤが、川で溺おぼれたんだわ。可愛い七つの子だったのに。ママは、もう辛抱しんぼうがなくなつて、出てらしたのだけわ。……あとも振返らずに、出てらしたんだわ。…

…（身ぶるいする）わたしママの気持よくわかるの、それがママに通じたらばねえ！  
 （間）あのペーチャ・トロファイモフは、グリーシャの家庭教師だったんだから、また  
 お思い出しになるかも知れないわね……

ファイルス登場。セビロに白チョッキのいでたち。

ファイルス （コーヒー沸かしのところへ行き、心配そうに）奥さまは、こちらで召し上  
 がるとおっしゃる。……（白手袋を両手にはめる）よいか、コツファイは？ （ドウ

ニヤーシャに向つて、きびしく）これ！ クリームはどうした？

ドウニヤーシャ あら、どうしましょう……（あたふたと退場）

ファイルス （コーヒー沸かしのまわりをそわそわしながら）ええ、この出来そこねえめ  
 が……（ぼそぼそ独り言をいう）パリからお帰りになった。……旦那さまもいつぞや、

パリへおいでなすつたつけな……馬車でな……（声を立てて笑う）

ワーリヤ ファイルス、お前なに言つてるの？

ファイルス はい、何と仰せで？ （嬉しそうに）奥さまがお帰りになりました！ お待

ち申した甲斐あつて。これでもう、死んでも思い残すことはありませんわい。……（嬉し泣きに泣く）

ラネーフスカヤ夫人、ガーエフ、ピーシチク登場。ピーシチクは薄いラシヤの袖なし胴着に、だぶだぶのズボンをはいている。ガーエフははいつてきながら、両腕と胴とで玉突きをしているような仕草をする。（訳注 原書には示していないが、ロパーヒンもこのとき登場するらしい）

ラネーフスカヤ どうするんですしたつけ？ ちよつとおさらいして……。黄玉は隅へ！  
空クツションで真ん中へ！

ガーエフ 薄く当てて隅へだ！ ねえお前、むかしはお前といっしょに、ほれこの子供部屋で寝たもんだが、今じゃわたしも五十一だ、なんだか妙な気もするがなあ……

ロパーヒン さよう、時のたつのは早いものです。

ガーエフ なんだって？

ロパーヒン いや、時のたつのは早い、と言ったので。

ガーエフ この部屋は、虫とり草のにおいがする。

アーニヤ わたし、行つて寝るわ。おやすみなさい、ママ。(母にキスする)

ラネーフスカヤ わたしの可愛い子。(娘の手にキスする) おまえ、うちに帰つて嬉しいだろうね? わたしは、まだほんとのような気がしないの。

アーニヤ おやすみなさい、伯父さま。

ガーエフ (彼女の顔と両手にキスする) ゆっくりおやすみ。なんてお前は、お母さん似なんだろう! (妹に) ねえリユーバ (訳注 ラネーフスカヤ夫人の名リユーボーフィの愛称) お前もこの年ごろには、この子そっくりだったよ。

アーニヤは片手をロパーヒンとピーシチクに与え、自分の部屋へ引きとつてドアをしめる。

ラネーフスカヤ あの子すつかりくたくたなのね。

ピーシチク 道中がさぞ長かったでしょうからな。

ワーリヤ (ロパーヒンとピーシチクに) どうなすつて、皆さん? やがて三時ですよ、

そろそろ紳士の体面をお考えになったらどうでしょう。

ラネーフスカヤ（笑う）お前、相変らずなのね、ワリーヤ。（彼女を引きよせてキスする）このコーヒーを飲んだら、それでお開きにしましょうね。（フィールス、夫人の足もとに足載せのクツシヨンを置く）ありがとうよ、フィールス。わたし、コーヒーが癖になってね、昼も夜も飲むんですよ。ありがとう、爺じいや。（フィールスにキスする）

ワリーヤ ちよつと見てこよう、荷物がみんな来ているかどうか。……（退場）

ラネーフスカヤ ほんとに、ここに坐すわっているのはわたしかしら？（笑う）わたし飛ん

で跳ねて、両手を振りまわしたい。（両手で顔をおおう）これが夢だったらどうしよう

！わたし神かけて、生れ故郷が好きですの、まるで母親に甘えるような気持ですの。

わたし汽車の窓から、とても見てはいられなくなつて、泣いてばかりいましたわ。（涙  
ごえで）それはそうと、コーヒーを頂かなくてはね。ありがとうよ、フィールス、あり  
がとう、爺じいや。お前が達者でいてくれて、わたしほんとに嬉しいよ。

フィールス おとといでございます。

ガーエフ 耳が遠いんだよ。

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、今朝の四時すぎに、ハリコフへ発たなければなりま

せん。じつに残念です！ ちよつとお目にかかつて、お話ししたいこともあったのですが……。しかし、相変らずご立派ですなあ。

ピーシチク（息をはずませながら）むしろ器量があられたくらいだ。……お召物もパリ好みでな……。わしらなど、どだい目がくらんで、まともにや拝めんほどですわい……。ロパーヒン あなたのお兄上、このガーエフさんは、わたしのことを下司げすだ、強欲だと言われますが、そんなこと、わたしは一向平気です。なんとも仰しやるがいい。ただわたしの望むところは、あなただけは元どおりわたしを信用してください。そのえも言われぬ、しみじみしたお眼めを、従前同様わたしに注いで頂きたいということ。いや、はや、思いだしてもゾツとする！ うちの親父おやじは、あなたのお祖父じいさんやお父さんの農奴だった。ところがあなたには、ほかならぬあなたという人には、わたしはいつぞや一方ならぬお世話になったことがある、それでわたしは、一切をきれいに忘れて、あなたを肉親のようにお慕いしています……。いや、肉親以上にです。

ラネーフスカヤ わたし、じつとしちやいられない、とても駄目だめ……。……（ぱつと立ちあがって、ひどく興奮のていで歩きまわる）嬉うれしくって嬉しくって、気がちがいそうだ。……。わたしを笑ってちようだい、ばかなんですもの。……。なつかしい、わたしの本棚ほんだな……

(戸棚にキスする) わたしの小つちやなテーブル……

ガーエフ お前の留守のまに、乳母ばあやが死んだよ。

ラネーフスカヤ (腰をおろし、コーヒ―を飲む) ええ、天国にやすらわんことを。知らせをもらいました。

ガーエフ それに、アナスターシイも死んだ。やぶにらみのペトルーシカは、うちから暇をとって、今じゃ町の署長のところにいる。(ポケットから氷砂糖の小箱を取りだし、しゃぶる)

ピーシチク わしの娘のダーシエンカが……よろしくと申しました……

ロパーヒン わたしはあなたに、何かとても愉快な、楽しい話がありました……(時計を出して見る) そろそろ発たなければならので、おしやべりをしているひまがありません……でまあ、ごくかいつまんで申しあげます。すでにご承知のとおり、お宅の桜の園は借財のカタで売りに出ておりまして、八月の二十二日が競売の日になっています。しかし、ご心配はいりません、奥さん、どうぞ、ご安心ねがいたい、打つ手はあります……そこでわたしの案をよく聴いていただきたいのですが! あなたの領地は、町からわずか五里のところにあつて、しかもついそばを鉄道が開通しました。でもし、この桜



の園と川沿いの土地一帯を、別荘向きの地所に分割して、それを別荘人種に貸すとしたら、あなたはいくら内輪に見積つても、年に二万五千の収入をおあげになれるわけです。ガーエフ 失礼だが、つまらん話だな！

ラネーフスカヤ あなたのお話、どうもよくわからないわ、ロパーヒンさん。

ロパーヒン つまり別荘人種から、三千坪に対して最低年二十五ルーブリの割で、地代をとり立てられるわけです。もし今すぐに広告なされば、このわたしが保証しますが、秋になるまでには一っかけらの空地も残さず、みんな借り手がつきますよ。早い話が万歳です、お家ご安泰というわけです。何しろ場所がらは絶好だし、川は深いし。ただ、もちろん、そこらをちよつと掃除したり、片づけたりはしなければなりません……例えばまあ、古い建物はみんな取払ってしまう。さしずめこの屋敷なんか、もうなんの役にも立ちませんからね。それに、古い桜の園なんかも伐り払ってしまう……

ラネーフスカヤ 伐り払うですって？ まああなた、なんにもご存じないのねえ。この県のうちで、何かしらちつとは増しな、それどころかすばらしいものがあるとするれば、それはうちの桜の園だけですよ。

ロパーヒン そのすばらしいというのも、結局はだだっぴろいだけの話です。桜んぼは二

年に一度なるだけだし、それだって、やり場がないじゃありませんか。誰ひとり買手が  
ないのでね。

ガーエフ 『百科事典』にだって、この庭のことは出ている。

ロパーヒン (時計をのぞいて) これといった思案も浮ばず、なんの結論も出ないとなる  
と、八月の二十二日には、桜の園はむろんのこと、領地すっかり、競売に出してしまうの  
ですよ。思いつきりが肝腎かんじんです！ ほかに打つ手はありません、ほんとです。ないと  
なったら、ないのですから。

フィールス 昔は、さよう四、五十年まえには、桜んぼを乾ほして、砂糖づけにしたり、酢  
につけたり、ジャムに煮たりしたものだ。それから、よく……

ガーエフ 黙っている、フィールス。

フィールス それからよく、乾した桜んぼを、荷馬車に何台も積んで、モスクワやハリコ  
フへ出したもんでござんしたよ。大したお金でしたわい！ 乾した桜んぼだって、あの  
頃ころは柔らかくてな、汁気しるけがあつて、甘味があつて、よい香りでしたよ。……あの頃は、  
こさえ方を知っていたのでな……

ラネーフスカヤ そのこさえ方が、今どうなったの？

フィールス 忘れちましたので。誰も覚えちやおりません。<sup>だれ</sup>

ピーシチク (ラネーフスカヤ夫人に) パリはいかがでした？ ええ？ 蛙を<sup>かえる</sup>あがりまし

たか？

ラネーフスカヤ ワニを食べましたよ。

ピーシチク こりや、どうだ……

ロパーヒン 今まで田舎といえば、地主と百姓しかいませんでしたが、<sup>こんにち</sup>今日では別荘人

種というものが現われています。どんな町でも、どんな小つぽけな町でも、ぐるり一め

ん別荘が建っています。このぶんでいくと、二十年もしたら、別荘人種はどえらい数に

なるでしょう。今でこそあの連中は、バルコンでお茶を飲むのがせいぜいですが、あに

図らんややがては、あの連中もめいめい三千坪の地面で、農作をはじめめるかも知れない。

そのあかつきには、お宅の桜の園も、豪勢な、ゆたかな、地上の天国になるでしょう。

ガーエフ (憤慨して) じつにくだらん！

ワーリヤ、ヤーシヤ登場。

ワーリヤ お母さま、電報が二通きていましたわ。（鍵束かぎたばをより分けて、音たかく古風な本棚をあける）ほら、これ。

ラネーフスカヤ パリからね。（ろくに読まずに、二通とも引裂く）パリとは、もう縁きりだわ……

ガーエフ ねえリユーバ、知ってるかい、この本棚の歳としをさ？ ついこないだ、一ばん下の引出しを抜いて見たらばね、焼印で年号が押してあるんだ。ちょうど百年まえにできたんだよ。どうだい、ええ？ さしずめ記念祭でももよおしたいところだよ。いくら命のないものにしろ、とにかくなんと言つたつて、本棚にはちがいないんだからね。

ピーシチク （びっくりして）百年……。こりや、どうだ！ ……

ガーエフ そう。大したもんさ。……（戸棚にさわってみて）親愛にして尊敬すべき戸棚よ！ 今や百年以上にわたつて、絶えず善と正義の輝かしい理想をめざして進んできた君の存在に挨拶あいさつを送る。みのり多き仕事へと招く君の無言の呼び声は、百年のあいだたゆむことなく、よく（涙ごえで）わが一家代々の人びとに、未来への勇氣と信念を保持せしめ、われわれのうちに、善と社会的自覚の理想を涵養かんようしてくれた。（間）

ロパーヒン なるほど……

ラネーフスカヤ あなた相変らずねえ、兄さん。

ガーエフ (いささか照れて) 右へ押して隅へ！ 薄く当てて真ん中へスポリ！

ロパーヒン (時計を出して見て) どれ、行かなくては。

ヤーシヤ (ラネーフスカヤ夫人に薬をさし出す) いかがでございます、丸薬をただ今召し上がっては……

ピーシチク 薬剤なんぞ、のむことはありませんよ、奥さん……毒にも薬にもなりやしませんや。……まあひとつ……こっちへおよこしなさい。(丸薬を受けとり、手の平へあけて、ふつと吹いて口へほうりこみ、クワスでのみくだす) この通り！

ラネーフスカヤ (あきれて) まああなた、気でもちがったの？

ピーシチク 丸薬をすっかり頂きました。

ロパーヒン なんて大食おおくらいだ！ (一同わらう)

フィールス このかたは、復活祭の時おいでになって、キュウリを半たる召し上がりましてよ…… (ぶつぶつつぶや呟く)

ラネーフスカヤ 何を言ってるのかしら？

ワーリヤ もう三年ごし、あんなふうにぶつぶつ言ってますの。わたしたち、馴なれてしま

いました。

ヤーシャ ご老体ですからな。

シャルロツタが白い服をきて、舞台をよこぎる。すこぶる瘦やせた体を、ぎゅつと緊しめあげるような着こなしで、バンドに柄えつき眼鏡をさげている。

ロパーヒン どうも失礼、シャルロツタさん、まだご挨拶をしませんでしたね。（彼女の手にキスしようとする）

シャルロツタ（手を引っこめながら）あなたに手をキスさせたら、次には肘ひじとおいでなさるでしょうよ、それから肩とね……

ロパーヒン どうも運が悪い、今日は。（一同わらう）シャルロツタさん、手品を見せてくださいよ！

ラネーフスカヤほんとにシャルロツタ、手品を見せてちょうだい！

シャルロツタ だめです。わたし眠いんですから。（退場）

ロパーヒン 三週間したらお目にかかります。（ラネーフスカヤ夫人の手にキスする）で

はそれまで、ご機嫌きげんよう。もう時間です。（ガーエフに）ではまた。（ピーシチクとキスをかわして）さようなら。（まずワーリヤと、ついでフィールス、ヤーシヤと握手して）発ちたくないなあ。（ラネーフスカヤ夫人に）別荘の件をとっくりお考えになって、決心がおつきでしたら、ちよつとお知らせを願います。五万ルーブリは作つて差しあげます。慎重にお考えください。

ワーリヤ （腹だたしく）さ、いい加減でいらつしやいよ！

ロパーヒン 行きます、行きますよ……（退場）

ガーエフ 下司め。いやこれは、ごめん《パルドン》。……ワーリヤはあの男のところへ嫁いくんだっけな、あれはワーリヤのムコさんだ。

ワーリヤ おじさん、余計なこと言わないで。

ラネーフスカヤ なによ、ワーリヤ、わたしそうなたら本当に嬉しい。あれは、いい人だもの。

ピーシチク 人物は、じつになんともはや……よくできた人で……。うちのダーシエンカも……やっぱりその、言っておりますよ……何やかやとな。（いびきをかいて、すぐまた目をさます）いや、それにしても奥さん……恐縮ですが貸してくださらんか……二百

四十ルーブリだけ……あす担保の利子を払わにやならんので……

ワーリヤ（仰天して）だめよ、だめですよ！

ラネーフスカヤ わたし、ほんとに一文もないのよ。

ピーシチク なあに出てきますよ。（笑う）決して希望は捨てません。いつぞやも、い

よいよ駄目だ、これで破滅だと観念したら、いや驚くまいことか、——鉄道がうちの地面を通つてね……金がころげこみましたよ。まあ見てご覧なさい、また何かあります

よ、今日でないまでも明日はね。<sup>あす</sup>ダーシエンカが二十万あてますよ……あれは富クジを一枚もつてますでな。

ラネーフスカヤ コーヒーも飲んだから、これでもう休めるわ。

フィールス（ブラシでガーエフの服を払いながら、訓戒口調で）またズボンをお間違えになった。ほんとに困ったお人だ！

ワーリヤ（小声で）アーニヤは寝ているわ。（そつと窓をあける）もう日が出た、寒く

ないわ。ご覧なさい、お母さん、なんて見事な桜の木でしょう！ すばらしいわ、この

空気が！ ムク鳥が啼<sup>な</sup>いている！

ガーエフ（べつの窓をあける）庭いちめん真っ白だ。おまえ忘れやしないだろう、え、



リユーバ？ この長い並木は、ずっとまつすぐ、まるで革帯をぴんと張ったように伸びて、月夜には白々と光るのだ。ね、覚えてるだろう？ 忘れはしまいね？

ラネーフスカヤ （窓から庭を眺めて）ああ、わたしの子供のころ、清らかな時代！ わたし、この子供部屋に寝て、ここから庭を眺めたものよ。あの頃は幸福が、毎朝わたしと一しよに目をさましたつけ。庭もこの通りだった、そっくりそのまま。（嬉しさのあまり笑う）真つ白、一めん<sup>な</sup>に真つ白ね！ ああ、わたしの庭！ 暗い、うつとうしい秋や、寒い冬を越して、またお前は若々しく、幸福で一ぱいだわ。天使たちが、お前を見すてなかつたのね。……ああ、わたしの胸や肩から、この重石<sup>おもし</sup>がとりのけられたら！  
わたしの過去を、きれいに忘れることができたなら！

……  
ガージェフ そう、だがこの庭も、借金のカタに売られてしまう。妙な話だが、仕方がない

ラネーフスカヤ あら、ご覧なさい、亡<sup>な</sup>くなつたお母さまが、庭を歩いてらっしゃるわ……  
…白い服を召して！（嬉しさのあまり笑う）たしかにそうだわ。

ガージェフ どれ、どこに？

ワリーヤ しつかりなすつて、お母さん。

ラネーフスカヤ 誰もいない、気のせいだったわ。右手の、あずまやへ行く曲り角に、白い若木の垂れているのが、女の影に似てたんだわ……

トロフィーモフ登場。着ふるした学生服をきて、眼鏡をかけている。

ラネーフスカヤ ほんとにすばらしい庭！ 花が真っ白にかさなって、あの青い空……

トロフィーモフ 奥さん！（夫人は彼をふりかえる）僕はちよつとご挨拶ほくだけして、すぐ引きさがります。（熱烈に手にキスする）朝まで待つように言われたんですが、とても我慢がならないもんで……

ラネーフスカヤ夫人、げげんそうに彼を見る。

ワーリヤ （涙ごえで）ペーチャ・トロフィーモフよ……

トロフィーモフ ペーチャ・トロフィーモフ、お宅のグリーンシャの家庭教師でした。……僕そんなに変わったでしょうか？

夫人は彼を抱いて、静かに泣く。

ガーエフ（当惑して）もういい、もういいよ、リユーバ。

ワーリヤ（泣く）だから言ったじゃないの、ペーチャ、あしたまでお待ちなさいって。

ラネーフスカヤ わたしのグリーシャ……ああ坊や……グリーシャ……可愛い子……

ワーリヤ 仕方がないわ、お母さん。神さまの思おぼしめ召しですもの。

トロフィーモフ（やさしく、涙なみだごえで）いいですよ、もういいですよ……

ラネーフスカヤ（静かに泣く）あの子は死んだ、溺おぼれてしまった。……なぜなの？ な

ぜでしょう、あなた？（声をひそめて）あすここでアーニヤが寝ているのに、わたし大

きな声して……うるさいわね。……まあ、どうなすったの、ペーチャ？ どうしてそん

なに風ふう采さいが落ちたの？ なんだってそう老ふけなすったの？

トロフィーモフ 汽車のなかでも、どつかの百姓ひょうしん婆ばあさんに、〃ねえ、禿はげの旦那だんな〃って言

われました。

ラネーフスカヤ あなたはあのころ、まるで子供で、可愛い学生だったわ。それが今じゃ、

髪のもも濃くはないし、眼鏡まで。ほんとに、今でも大学生なの？（ドアのほうへ行

く）

トロフィーモフ きつと僕は、万年大学生でしようよ。

ラネーフスカヤ（兄に、それからワーリヤにキスする）さあ、行っておやすみなさい。

……あなたも老けたわねえ、レオニード。

ピーシチク（夫人のあとにつづく）では、これでおねんねか。……ええ、この足痛風めが。今日は泊めていただきますよ。……とにかくわしは、ねえ奥さん、あすの朝にや……

……二百四十ルーブリというものが……

ガーエフ あいつ、自分のことばかりだ。

ピーシチク 二百四十ルーブリ……担保の利子を払うんでね。

ラネーフスカヤ お金なんかありませんよ、わたし……

ピーシチク 返しますからさ、奥さん。……わずかな金高じゃありませんか……

ラネーフスカヤ じゃいいわ、レオニードにたのみましよう。……出してあげて、レオニード。

ガーエフ よし、出してやろう。ポケットをあけて待ってるがいい。

ラネーフスカヤ 仕方がないじゃないの、出したげなさいよ。……この人いるんだから……返すと言うんだし。

ラネーフスカヤ夫人、トロフィーモフ、ピーシチク、フィールズ退場。ガーエフ、ワ  
ーリヤ、ヤーシヤ残る。

ガーエフ 妹は、まだ金をばらまく癖が直らん。 (ヤーシヤに) いい子だから、も少し  
あつちい行つてくれ。お前はニワトリ臭くてかなわん。

ヤーシヤ (冷笑をうかべて) そういう旦那は、相変らずでらつしやるね。

ガーエフ なに? (ワーリヤに) こいつ、なんと言ったのかね。

ワーリヤ (ヤーシヤに) お前のおつ母さんが村から出て来て、きのうから下の部屋しもで待  
つてるよ、ちよつと会いたいって……

ヤーシヤ ちえつ、うるさいつたらありやしねえ!

ワーリヤ まあ、いけずうずう々しい!

ヤーシヤ 余計なこつた。あすでも来りやいいのにさ。 (退場)

ワリーヤ お母さんは相変らずで、ちつともお変りにならない。勝手にさせておいたら、何もかも人にやってしまおうわ。

ガーエフ そうさ……（間）何かの病気にたいして、あれもこれもと、いろんな薬をすずめるような時は、つまりその病気が不治だというわけだ。わたしも、脳みそをしぼって考えてるんだが、するといろんな手が浮ぶね。あんまり沢山あるもんで、つまり本当のところは、一つもないということになる。誰かの遺産がころげこめばよし、アーニヤを大金持のところへ嫁にやるのもよし、それともヤロスラーヴリへ出かけて行って、はくし伯爵夫人の伯母さんにぶつかってみるのも悪くはあるまい。伯母さんは、とてもどえらい金持だからな。

ワリーヤ （泣く）どうぞそうなればねえ。

ガーエフ 泣かないでもいい。伯母さんはとても金持なんだが、われわれきょうだい兄あに妹いもうとが好ふせいきじゃない。だいいち妹が、貴族でもない弁護士風情ふうせいについだものでな……

アーニヤがドアのところに現われる。

ガーエフ 貴族でもない男と結婚した上に、行状も大いに宜よろしかつたとは言えないからな。あれは立派な女だ。氣立てもいいし、親切だ。わたしは大好きなんだが、それにしたつて、いくらヒイキ目に見たところで、やはり不身持ちなことだけは認めないわけには行かん。こいつは、ちよつとした身ぶり一つにも出ているよ。

ワーリヤ (ひそひそ声で) アーニヤがドアのところにありますよ。

ガーエフ なんだつて? (間) おや、おかしい、何か右の眼めにはいった……よく見えな  
いぞ。それで木曜にね、地方裁判所へ行つたら……

アーニヤはいつてくる。

ワーリヤ どうして寝ないの、アーニヤ?

アーニヤ 寝られないの。だめなの。

ガーエフ 可愛い子。(アーニヤの顔や手にキスする) わたしの子…… (涙なみだごえで) お前は姪めいどころじゃない、わたしのエンジェルだ、わたしの一切だ。信じておくれ、わたしを、ほんとだよ……

アーニヤ 信じてますわ、伯父さん。みんなあなたが好きで、尊敬しています……でもねえ、伯父さん、あなたは黙ってらっしゃらなけりやいけないわ、ただじっと黙ってね。今しがたも、わたしのママのことを、なんて言ってらしたの？ ご自分の妹じゃありませんか？ なんだって、あんなことを仰おっしやるの？

ガーエフ なるほど、なるほど……（彼女の片手で自分の顔をおおう）まったく、厭いやになるよ！ いやどうも、情けないこった！ おまけに先刻さつきは、本棚ほんだなの前で演説をした……ばかばかしい！ 済んでからやつと、ばかげていることがわかったんだ。

ワーリヤ ほんとよ、伯父さん、黙ってらっしゃるに限るわ。黙っていれば、それでいいのよ。

アーニヤ 黙ってらっしゃれば、ご自分だって気が休まるわ。

ガーエフ 黙るよ。（アーニヤとワーリヤの手にキスする）黙るよ。ただ、ちよつと大事な話があるんだ、木曜に地方裁判所へ行ったら、偶然、仲間が寄り合っちゃまってね、あれやこれやと四方山よもやまばなしが出たなかで、どうやらその、手形で金を借りて、銀行の利子が払えそうなんだ。

ワーリヤ どうぞそうなればねえ！



ガーエフ 火曜日に出かけて行って、もう一度話してみよう。(ワリーヤに) 泣かないでもいい。(アーニヤに) ママさんはロパーヒンに相談するだろうさ。あの男は、もちろん、いやとは言うまい。……それからお前は、ひと休みしたら、ヤロスラーヴリの伯爵夫人のところへ行ってみるんだな、お前の大伯母さんだからね。といった工合に、三方から運動すれば——もうこつちのものだ。利子は払えるさ、断じてね。……(氷砂糖を口へ入れる) わたしの面目なりなんなり、なんでもかけて誓うが、この領地は売られるものかね! (興奮して) ぼくの幸福にかけて誓う! さあ、この手が証人だ(片手を相手に差出す)——もしこの僕が、ずるずる競売へまで持ちこませたら、その時こそ僕を、やくざとでも恥しらずとでも言うがいい! ぼくの全存在にかけて誓うよ!

アーニヤ (気持の落ちつきが戻もどってきて、彼女は幸福だ) あなたは、なんていい人でしょう、伯父さま、なんて利口な! (伯父を抱く) やっと安心したわ! わたし安心して、とても幸福!

フィールス登場。

フィールス (咎めるように) 旦那さま、ばちが当たりますぞ！ いつおやすみになりますので？

ガーエフ ああ今、すぐだよ。お前はさがつていい、フィールス。なあに、こうなりやもう、わたしは一人で着かえるよ。じや子供たち、お寝んねだよ。……詳しい話は明日のこととして、もう行って寝なさい。(アーニヤとワーリヤにキスする) わたしは八〇年代(訳注 一八八〇年代。ナロードニキー運動の退潮期)の人間だ。……なるほど評判のわるい時代じゃあるが、それにしたつて、こうは言えるな——信念のため僕だつて、少なからぬ苦痛をなめてきたもんだとね。百姓が僕を好いてくれるのも、まんざら不思議はない。農民を知らなくてはいかん！ そもそも彼らが、いかなる……

アーニヤ また、伯父さま！

ワーリヤ 伯父さん、黙つてらっしゃい。

フィールス (腹だたしげに) 旦那さま！

ガーエフ 行くよ、行くよ。……二人とも寝なさいよ。トゥー・クツションで真ん中へ！  
みごとなやつをな……(退場。フィールスちよこちよこ後にしたがう)

アーニヤ これで安心だわ。ヤロスラーヴリへなんか、わたし行きたくない。あのおばあ

さま、嫌きらいなんだもの。でも、とにかくホツとしたわ。ありがとう、伯父さま。（腰かける）

ワリーヤ もう寝なくつちや。どれ行きましよう。そうそう、あんたの留守のまに、厭なことがあったの。あの古いほうの下部屋しもには、あんたも知つてのとおり、古手の召使ばかりいるでしょう、——エフィーミュシカだの、ポーリヤだの、エフスチーグネイだの、カールプだのつて。あの連中、どこかの浮浪人どもを引っぱりこんで泊めだしたのよ。わたし黙つていてやった。そこへ耳にはいったんだけど、わたしがあの連中にエンドウ豆ばかり食べさせるような、そんな噂うわさを飛ばしてるの。しわん坊だから、ですつてさ。……それがみんな、エフスチーグネイの仕業なの。……「よし、そんならこつちも覚悟がある」と、わたしは思つてね、エフスチーグネイを呼びつけた……（あくびをする）するとやつて来たから……「なんてお前は、ええエフスチーグネイ……馬鹿ばかなんだい」つて言つてね……（アーニヤを見て）アーニチカ！……（間）寝ちまった。……（アーニヤの腕をかかえて）さ、ベッドへ行きましよう。……さ、行くのよ！……（連れて行く）わたしのいい子がおねんねだ！ さ、行きましよう……（ふたり行く）

はるか庭の彼方かみなたで、牧夫が芦笛あしぶえを吹く。トロフィーモフが舞台を通りかかり、ワーリヤとアーニヤを見て、立ちどまる。

ワーリヤ　しッ……このひと寝てるのよ。……寝てるのよ。さあ行きましようね、可愛い子。

アーニヤ　（小声で、夢見ごこちで）とてもくたびれたわ、わたし……まだ馬車の鈴の音がしてるわ。……伯父さま……いい人ね、ママも、伯父さまも……

ワーリヤ　行きましよう、アーニチカ、行きましようね……（アーニヤの部屋へはいる）  
トロフィーモフ　（感きわまつて）おお、ぼくの太陽！　ぼくの青春！

——幕——

## 第二幕

野外。とうに見すてられ、傾きかかった古い小さな礼拝堂がある。そのそばに井戸。もとは墓標であつたとおぼしい大きな石が幾つか。古びたベンチが一つ。ガーエフの田舎屋敷へ通じる道が見える。片側に、高くそびえたポプラが黒ずんでいる。そこから桜の園がはじまるのだ。遠景に電信柱の列。さらに遙か遠く地平線上に、大きな都会のすがたがぼんやり見える。それは、よつぽど晴れわたった上天気でないと思えないのだ。まもなく日の沈む時刻。

シャルロツタ、ヤーシャ、ドウニヤーシャが、ベンチにかけている。エピホードフはそばに立つて、ギターを弾いている。みんな思い沈んで坐すわっている。シャルロツタは古いヒサシ帽をかぶり、肩から銃をおろして、革ひもの留金をなおしにかかる。

シャルロツタ（思案のていで）わたし、正式のパスポートがないもので、自分が幾つな

のか知らないの。それでいつも若いような気がしているわ。まだ小娘だったころ、お父つあんとおつ母さんは市いちから市いちへ渡り歩いては、見世物を出していたの、なかなか立派なものだった。わたしはサルとんぼ・モルターがえりをやったり、いろんな芸当をやったものよ。お父つあんもおつ母さんも死んでしまうと、あるドイツ人の奥さんがわたしを引取って、勉強させてくれた。そう。やがて大きくなって、家庭教師になった。だが一たい自分が、どこの何者なのか——さっぱり知らないの。……両親がどういう人だったか、正式の夫婦だったかどうか……それも知らない。(ポケットからキュウリを出してかじる) なんにも知らないわ。(間) いろいろ話もしたいけれど、話相手もなし……。わたしには誰だれもないんだもの。

エピソード (ギターを弾きながら歌う)

浮世を捨てしこの身には

友もかたきも何かせん……

マンドリンを弾くのは、いいもんだなあ!

ドウニヤーシャ それはギターよ、マンドリンじゃないわ。(ふところ鏡を見ながら白おしろ粉いをはたく)

エピソードフ 恋に狂った男にとつちや、これもマンドリンさね。……（口ずさむ）

たがいの恋の炎もて

胸もえ立ちてあるならば……

ヤーシヤ、声をあわせる。

シャルロツタ すごい歌い方なこと、この人たち……ふッ！ 山犬みたいだ。

ドウニヤーシヤ （ヤーシヤに）それにしても、外国へ行くなんて、ほんとにいいわねえ。

ヤーシヤ そりや、もちろんさ。あえて異論は唱えませんねえ。（あくびをして、葉巻を

吸いはじめる）

エピソードフ わかりきった事さ。外国じや総すべてが、とうの昔に完全なコンプリート（訳

注 原語は Complexion に当る外来語で、「体格」の意味。それを「完成」の意味に使っ

ているおかし味。以下エピソードフの半可通ぶりは続出する）に達してますからね。

ヤーシヤ もちろんね。

エピソードフ 僕は進歩ほくした人間で、いろんな立派な本を読んでいるが、それでいてどう

しても会得<sup>えとく</sup>できんのは、結局ぼくが何を欲<sup>ほつ</sup>するか、つまりその傾向なんですよ——生くべきか、それとも自殺すべきか、つまり結局それなんだが、にもかかわらず僕は、ピストルは常に携帯していますよ。そらね……（ピストルを出して見せる）

シャルロツタ やつと済んだ。どれ行こうかな。（銃を肩にかける）ねえエピホードフ、あんたは大そう頭のいい、大そうおつかない人だことねえ。さだめし女の子が、夢中になつて惚<sup>ほ</sup>れこむだろうさ。ブルルル！（行きかける）才子とか才物とかいった手合いは、みんなこうしたお馬鹿<sup>ばか</sup>さんばかりさ。話相手なんか誰もいやしない。……しよつちゆう独り、独りぼつち、わたしにや誰もいないのさ……そういう私が何者か、なんで生れてきたのか、それもわかつたものじゃない……（ゆっくり退場）

エピホードフ つまり結局ですな、ほかの問題はさておいて、自分一個のことに關するかぎり、ともあれ僕はつぎのごとく言わざるを得んのですよ——運命が僕を遇することの無慈悲残忍なる、あらしが小舟をもてあそぶに異ならん、とね。かりに一步をゆずつて、この僕の考えが間違つているとすれば、では一体なぜ、今朝ぼくが目をさましてみると、まあ一例として言えばですな、おつそろしく大きな蜘蛛<sup>くも</sup>が、僕の胸のうえに乗つかつていたんでしよう。……こんなやつがね（両手で示す）。同様にして、クワスでノドをう



るおそうと思つて手にとると、またしても、いやはや、たとえば油虫といったたぐいの、極度に無礼千万なやつがはいっている。(間) あんたはバックル(訳注 十九世紀イギリスの文明史家)を読んだことがありますか? (間) じつはね、ドウニヤーシヤさん、ほんの二言三言、御意を得たいことがあるんですがね。

ドウニヤーシヤ どうぞ。

エピホードフ それが実は、さし向いでお願ひしたいんですが……(ため息をつく)

ドウニヤーシヤ (当惑して) そう、いいわ……でもその前に、わたしの長外套がいたうを持って

きてくださらない。……洋服ようふく筆筒だんすのそばにあるわ。……すこし、じめじめしてきた……

…

エピホードフ いや、かしこまりました……持つて参りましょう。……さあこれで、この

ピストルをどうしたらいいか、やつとわかつたぞ。……(ギターを取りあげ、軽く弾き

ながら退場)

ヤーシヤ 二十二の不仕合せか! ばかなやつだよ、ここだけの話だが。(あくび)

ドウニヤーシヤ ピストル自殺なんかされたら困るわねえ。(間) あたし、このごろ落ち

つきがなくなつて、しよつちゆう胸さわぎがするの。ほんの小娘のころから、お屋敷へ

あがつたもんだから、今じやしもじもの暮しを忘れてしまって、手だつてほらこんなに白くて、まるでお嬢さんみたい。氣持まで華奢きゃしゃになつて、そりやデリケートで、上品で、なんにでもびくびくするの。……とつても怖いのよ。だからヤーシヤ、もしもあなたに裏切られでもしたら、あたし神経がどうかなくなつてしまうことよ。

ヤーシヤ（キスしてやつて）可愛かわいいキュウリさん！もちろん娘というものは、自分を忘れたらおしまいだ。だから僕が何より嫌いきらなのは、身もちのわるい娘さんさ。

ドウニヤーシヤ あたし、あんたが大好き。教養があつて、どんな理屈だつてわかるんだもの。（間）

ヤーシヤ（あくびをして）そうさな。……僕に言わせりや、こうさ——娘さんが誰かを好きになつたら、つまりふしだらなんだな。（間）きれいな空氣のなかで、葉巻をふかすのはいい氣持だなあ。……（きき耳を立てて）誰か来るぞ。……ありや奥さんがただ

……

ドウニヤーシヤは、いきなり彼を抱擁する。

ヤーシヤ　うちへ帰りなさい、川へ水浴びに行つたような顔をして、こつちの小径こみちから行きたまえ。うっかり出くわそうもんなら、僕がさも君と逢あひびき引してたように思われるかな。そいつはたまらんからなあ。

ドウニヤーシヤ　（そつと咳せきをする）葉巻のけむで、あたし頭痛がしてきたわ。……（退場）

ヤーシヤは居残つて、礼拝堂のそばに坐る。ラネーフスカヤ夫人、ガーエフ、ロパーヒン登場。

ロパーヒン　最後の肚はらをきめて頂きたいですな、——時は待つちやくれませんが、なんにもありやしない。この土地を別荘地として出すのに、ご賛成かどうか？　否いやか応か、一こと返事してくださいね。たつた一言！

ラネーフスカヤ　誰だろう、ここで嫌いやらしい葉巻をふかすのは！　（腰をおろす）

ガーエフ　鉄道が敷けてから、便利になつたものさ。（腰をおろす）こうして町へ出かけ、ひる飯をやつてこられるんだから……黄玉は真ん中へ！　何はともあれ家うちへ行つ

て、一勝負やりたいもんだが……

ラネーフスカヤ まだ大丈夫ですよ。

ロパーヒン ね、ほんの一言！（哀願するように）ねえ、どうかお返事を！

ガーエフ（あくびまじりに）なんだね、そりや？

ラネーフスカヤ（巾着きんちやくをのぞいて）昨日はお金ずいぶん沢山あったのに、今日はか

らつきしないわ。ワーリヤは可哀かわいそうに、なんとか切りつめようとして、わたしたちに

はミルクのスープを出し、勝手もとじや年寄り連中にエンドウ豆ばかり食べさせてると

いうのに、わたしは何やら訳もわからない無駄むだづかいをしている。……（巾着をとり落

す。金貨がばらばらこぼれる）あら、こぼれちまった……（無念の思い入れ）

ヤーシャ ご免ください、ただ今ひろって差上げます。（金貨をひろう）

ラネーフスカヤ ご苦労さん、ヤーシャ。それにわたし、なんだってお午ひるなんか食べに行

ったんだらう。……あなたご推奨のあのちやちなレストラン。音楽つきだかなんだか知

らないけれど、テーブル・クロスがシャボンくさかったわ。……おまけに、なぜあんな

に沢山のむことがあるの、ええリヨーニヤ？ なぜ、あんなにどつきり食べたり、しゃ

べり散らしたりすることがあるの？ 今日もあのレストランで、あなたは散々またおし

やべりをして、それがみんな、とんちんかんだったじゃないの。七〇年代（訳注 一八七〇年代。ナロードニキー運動の全盛時代）がどうしたの、デカダンがどうのって。しかも相手は誰だったの？ 給仕をつかまえて、デカダン論をなさるなんて！

ロパーヒン なるほど。

ガーエフ （片手を振って）わたしのあの癖は、とても直らんよ。とても駄目だ……（癩か癩んまぎれにヤーシヤに）なんとやくいう奴だ、しよつちゆう人の前をちらちらしおつて

……

ヤーシヤ （笑う）わたしや、旦那だんなの声をきくと、つい笑いたくなるんで。

ガーエフ （妹に）わたしが出てくか、それともこいつが……

ラネーフスカヤ あつちへおいで、ヤーシヤ、さ早く……

ヤーシヤ （ラネーフスカヤ夫人に巾着をわたす）ただ今まいります。（やつと嘖きだすのをこらえて）はい、ただ今……（退場）

ロパーヒン お宅の領地は、金満家のデリガーノフが買おうとしています。競売当日は、大将自身が出馬するという話です。

ラネーフスカヤ どこでお聞きになつて？

ロパーヒン 町で、もつぱらの評判です。

ガーエフ ヤロスラーヴリの伯母さんから、送つてよこす約束なんだが、いつ幾ら送つてくれるつもりか、それがわからん……

ロパーヒン 幾ら送つてよこされるでしょうか？ 十万？ それとも二十万？

ラネーフスカヤ そうね……一万か——せいぜい一万五千、それで恩にきせられて。

ロパーヒン 失礼ですが、あなたがたのような無分別な、世事にうとい、奇怪千万な人間にや、まだお目にかかったことがあります。ちゃんとロシア語で、お宅の領地が売りに出ていると申しあげているのに、どうもおわかりにならないようだ。

ラネーフスカヤ 一体どうしろと仰おつしやるの？ 教えてちょうだい、どうすればいいの？

ロパーヒン だから毎日、お教えしてるじゃありませんか。毎日毎日、ひとつ事ばかり申しあげていますよ。桜の園も、宅地も何も、別荘地として貸しに出さなければならん、それを今すぐ、一刻も早くしなければならん、——競売はつい鼻の先へ迫っている、とね！ いいですか！ 別荘にすると、最後の肚をきめさえすれば、金は幾らでも出す人があります、それであなたがたは安泰なんです。

ラネーフスカヤ 別荘、別荘客——俗悪だわねえ、失礼だけど。

ガーエフ わたしも全然同感だ。

ロパーヒン わたしはワアツと泣きだすか、どなりだすか、それとも卒倒するかだ。とても堪らん！ あなたがたのおかげで、くたくたです！（ガーエフに）あなたは婆あだ、まるで！

ガーエフ なんとね？

ロパーヒン 婆あですよ！（行こうとする）

ラネーフスカヤ（おびえて）いいえ、行かないでちょうだい。ここにいて、ねえ。後生だから。何か考えつくかもしれないもの！

ロパーヒン 今さら、なんの考えることが！

ラネーフスカヤ 行かないで、お願い。あなたがいると、とにかく気がまぎれるわ。……

（間）わたし、しよっちゅう、何かあるような気がしているの——今にもわたしたちの頭の上に、家がどさりと崩れてきでもしそうな。

ガーエフ（沈思のていで）空クツションで隅へ。……ひねって真ん中へ……

ラネーフスカヤ わたしたち、神さまの前に、あんまり罪を作りすぎたのよ……

ロパーヒン なんです、罪だなんて……

ガーエフ（氷砂糖を口に入れて）世間じや、わたしが全財産を、氷砂糖でしゃぶりつくしたと言っているよ……（笑う）

ラネーフスカヤ ああ、わたし罪ぶかい女だわ。……まるで気持ちがいみみたいに、方図もなくお金を使いまわす癖がある上に、借金するほか能のない男にとついだんです。その夫は、シャンパンがもとで死にました——お酒に目のない人でしたからね。そのうえまた不幸なことに、わたしはほかの男を恋して、一緒になったの。すると、ちようどその時、——これが最初の天罰で、真つ向からぐさりと来たのが、——ほら、あすこの川で……坊やが溺れ死んだことでした。そこでわたしは、外国へ発ったの。発ちつばなしで、もう二度と帰ってはこまい、あの川も見まい、とおもってね。……わたしが眼をつぶって、無我夢中で逃げだしたのに、あの人は追っかけてきたの……情けも容赦もなくね。わたしがマントンの近くに別荘を買ったのも、あの人があそこに病みついたからで、それから三年というもの、わたしは夜も日もホツとするひまがなかった。病人にいびり抜かれて、心がカサカサになってしまいました。とうとう去年、借金の始末に別荘が人手にわたってしまったと、わたしはパリへ行きました。そこで、わたしから搾れるだけ搾りあげた挙句、あの人はわたしを捨てて、ほかの女と一緒にになったの。わたし毒をのもうとし



ました。……われながら浅ましい、世間に顔向けならない気がしてね。……ところが、急に帰りたくなつたの——ロシアへ、生れ故郷へ、ひとり娘のところへね。……（涙をふく）神さま、ああ神さま、どうぞお慈悲で、この罪ぶかい女をお赦ゆるしてください！  
 この上の罰は、堪かん忍にんしてくださいまし！（ポケットから電報を出して）今日、パリから来たの。……赦してくれ、帰つて来てくれ、ですつて。……（電報を引裂く）どこかで音楽がきこえるようね。（耳を澄ます）  
 ガーエフ あれは、この有名なユダヤ人の楽団だよ。ほら覚えてるだろう。バイオリンが四つに、フルートとコントラバスさ。

ラネーフスカヤ あれ、まだあるの？ なんとかあれを呼んで、夜会を開きたいものね。  
 ロパーヒン （耳をすます）聞えないな……（小声で口ずさむ）「金かねのためならドイツっぽうは、ロシア人化ばかしてフランス人に変える」（笑う）いや、きのうわたしが劇場で見た芝居しばといつたら、じつに滑稽こっけいでしたよ。  
 ラネーフスカヤ ちつとも滑稽じやないのよ、きつと。あんたは芝居なんか見ないで、せいぜい自分を眺ながめたほうがよくつてよ。なんてあんたの暮しは、不趣味なんでしょう、よけいなおしやべりばかりして。

ロパーヒン そりやそうです。正直のはなし、われわれの暮しは馬鹿げています。……

(間) うちの親父はどん百姓で、アホーで、わからず屋で、わたしを学校へやってもくれず、酔っぱらつちや殴りつけるだけでした——それも棒つきれでね。底を割って言えば、わたしもご同様、アホーで、でくのぼうなんです。何一つ習ったことはなし、字を書かしたらひどいもんで、とても人さまの前には出せない豚の手ですよ。

ラネーフスカヤ 結婚しなくちやいけないわ、あなたは。

ロパーヒン なるほど。……そりやそうです。

ラネーフスカヤ うちのワリーヤはどう？ いい子ですよ。

ロパーヒン なるほど。

ラネーフスカヤ あの子は百姓のうちから貰われてきて、あのとおりの働きもんだし、第一あなたを愛していますわ。それにあんただって、とうからお好きなんだし。

ロパーヒン そりやまあ、わたしも嫌いじゃありません。……いい娘さんです。(間)

ガーエフ わたしを銀行へ世話しよう、と言ってくれる人があるんだがね。年収六千とい  
うんだが……。聞いたかね？

ラネーフスカヤ 柄でもないわ！ まあ、じっとしてらっしゃい……

フィールズ登場。外套をもつてきたのである。

フィールズ (ガーエフに) さあさ、旦那さま、お召しになって。じめじめして参りましたよ。

ガーエフ (外套を着る) お前には閉口だよ、爺じいや。

フィールズ あきれたお人だ。……今朝だって、黙ってふらりとお出かけにはなるし。

(彼をじろじろ眺めまわす)

ラネーフスカヤ なんて年をとつたの、お前は。ええフィールズ！

フィールズ なんと仰しやいましたので？

ロパーヒン お前さんがひどく老ふけたと仰しやるんだよ！

フィールズ 長生きしましたからな。いつだったか、嫁をとれと言われた時にや、あなた

のお父さまもまだこの世に生れておいでになりませんでしたよ。……(笑う) 解放令

(訳注 一八六一年に公布された農奴解放令) が出た時にや、わたしはもう下男頭になつておりました。あの時わたしは、自由民になるのはご免だと申して、引きつづきご奉

公をいたしましたよ。……（間）当時は、忘れもしませんが、みんな面白おもしろおかしくやつておりましたよ。何が面白いのか、自分たちもわからずにね。

ロパーヒン 昔はまったく好よかつたよ。とにかく、存分ひつぱいたからなあ。

フィールズ （よく聞きとれずに）そりやそうとも。昔は、旦那あつての百姓、百姓あつての旦那でしたものねえ。それが今じゃ、てんでんばらばらで、何がなんだかわかりはしねえ。

ガーエフ ちよつと待った、フィールズ。あすわたしは、町へ出かけなければならん。あの將軍に引合わせてくれるという約束なんだ。その人が、手形で融通してくれそうなのでね。

ロパーヒン なあに物になりやしませんよ。利子だつて払えるもんですか、まあ安心してらっしゃい。

ラネーフスカヤ このひと寝言を言つてるのよ。將軍なんて、いるものですか。

トロファイモフ、アーニヤ、ワーリヤ登場。

ガーエフ さあ、連中がやってきた。

アーニヤ ママがいるわ。

ラネーフスカヤ (優しく) おいで、さ、こつちへ。……二人とも、いい子ね…… (アーニヤとワリーヤを抱く) わたしがどんなにあなたを愛してるか、わかってくれたらねえ。ならんでお坐<sup>すわ</sup>り、ほらね、こう。

みなみな腰をおろす。

ロパーヒン わが万年大学生先生は、いつもお嬢さんがたと一緒だね。

トロフィーモフ 君の知ったことじゃない。

ロパーヒン この人は、そろそろ五十になるといふのに、相変らずまだ大学生だ。

トロフィーモフ 愚劣な冗談はいい加減にしたまえ。

ロパーヒン 何を怒るんだね、変つてるなあ？

トロフィーモフ ほつといってくれつたら。

ロパーヒン (笑う) ところで一つ伺うけれど、君は僕<sup>ぼく</sup>のことを、なんと思ってるかね？

トロフィーモフ 僕はね、ロパーヒン君。こう思ってますよ——あんたは金持だ、おつつけ百万長者になるだろう。新陳代謝の意味では、猛獣が必要だ。なんでも手当り次第、食っちゃうやつがね。君の存在理由も、要するにそれさ。

一同わらう。

ワーリヤ ねえペーチャ、あんたは遊星ほしの話でもしたほうが似合うわ。

ラネーフスカヤ それよか、どう、きのうの話の続きをしたら。

トロフィーモフ なんの話でしたっけ？

ガーエフ 人間の誇りのことさ。

トロフィーモフ きのうは、長いこと議論したけれど、けっきよく結論は出ませんでしたね。あなたの言われる意味で行くと、人間の誇りなるものには、何か神秘的なところがありますね。まあそれも、一説として正しいかも知れませんが、がしかし率直に、虚きよしん心たんかい坦懐たんかいに判断してみるとです、そもそもその誇りなるものが怪しいと言わざるを得ない。げんに人間が生理的にも貧弱にできあがっており、その大多数が粗野で、愚かで、すこ

ぶるみじめな境涯きょうがいにある以上、誇りとかなんとかいっても、なんの意味があるでしょうか。自惚うぬぼれはいい加減にして、ただ働くことですよ。

ガーエフ どっちみち死ぬのさ。

トロフィーモフ わかるもんですか？ 第一、死ぬとは一体なんでしょう？ もしかすると、人間には百の感覚があつて、死ぬとそのうちわれわれの知っている五つだけが消滅して、のこる九十五は生き残るのかも知れない。

ラネーフスカヤ なんてお利口さんなんでしょう、ペーチャ！ ……

ロパーヒン (皮肉に) おつそろしくね！

トロフィーモフ 人類は、しだいに自己の力を充実しつつ、進歩して行きます。今は人類の及びがたいものでも、いつかは身近な、わかり易やすいものになるでしょう。ただそのためには、働かなければならない。真理を探求する人たちを、全力をあげて援助しなければならぬのです。今のところ、わがロシアでは、ごく少数の人が働いているだけで、僕の知っているかぎりインテリ「ゲンツイヤ」の大多数は、何一つ求めもせず、何一つしもせず、差当り勤労に適しません。インテリなどと自称しながら、召使は「きさま」呼ばわりする、百姓は動物あつかいにする、ろくろく勉強もせず、何一つ真面目まじめには読ま

ず、なんにもせず、ただ口先で科学を云々するばかり、芸術だつてろくにわかつちやいない。みんな真面目くさつて、さも厳肅な顔つきをして、厳肅なことばかり口にし、哲学をならべているが、その一方かれら一人一人の眼の前では、労働者たちがひどい物を食い、一部屋に三十人四十人と、枕もしないで寝ている。(訳注 \*以下は上演当時の検閲のため削除されたので、一九〇四年の初版本には、次のようにぼかされていた。

——「その一方、われわれの大多数、百中の九十九までが、野蛮人みたいな暮しをして、何かといえば——すぐぶんなぐる、罵倒する、ひどい物を食つて、息のつまるような汚ない所に寝て」) どこもかしこも南京虫と、鼻をつく悪臭と、ひどい湿気と、道德的腐敗ばかりです。……で、われわれのやる麗々しい会話はみんな、ただ自分や他人の眼をくらますためであることは、言わずして明らかです。ひとつ教えていただきたい、——あれほどやかましく喋々ちようちようされている託児所は、一体どこにあるんです? 読書の家は、どこにあります? それは小説に出てくるだけで、実際は全然ありやしない。あるのはただ、泥んこと、俗悪と、アジア的野蛮だけだ。……僕は、真面目くさつた顔つきが、身ぶるいするほど嫌いきらです。真面目くさつた会話にも、身ぶるいが出る。いつそ黙っていたほうがましですよ。



ロパーヒン いや、わたしはね、毎朝四時すぎに起きだして、朝から晩まで働きづめでしょ。よつちゆう自分や他人の金を扱っているが、見れば見るほど、まわりの人間が厭いやになるね。何かちよいと新しい仕事に手をつけさえすりや、世間に正直な、まともな人間がどんなに少ないかが、すぐにわかる。時どき、寝られない晩なんか、こんなことを考えたりしますよ、——「神よ、あなたは実にどえらい森や、はてしもない野原や、底しれぬ地平線をお授けになりました。で、そこに住むからには、われわれも本当は、雲つくよ。うな巨人でなければならんはずです……。」とね。

ラネーフスカヤ まあ、巨人がご入用ですって……。お伽ときばなし話のなかでこそ、あれもいけれど、ほんとに出てきたら怖いわ。

舞台の奥をエピホードフが通りかかって、ギターを弾く。

ラネーフスカヤ (もの思わしげに) エピホードフが歩いている。……

アーニヤ (もの思わしげに) エピホードフが歩いている。

ガーエフ 日が沈んだよ、諸君。

トロフィーモフ そう。

ガーエフ (低い声で、朗読口調で) おお、自然よ、靈妙なるものよ、おんみは不滅の光明に輝く。われらが母と仰ぐ、美しく冷やかなおんみは、おのれのうちに生と死を結び合す。おんみは物みなを生み、物みなを滅ぼす。……

ワーリヤ (哀願するように) 伯父さん!

アーニヤ 伯父さま、また!

トロフィーモフ あなたは、黄玉を空<sup>から</sup>クッションで真ん中へ、のほうがいいですよ。

ガーエフ 黙るよ、黙っているよ。

みんな坐つて、物思いに沈む。静寂。聞えるのは、フィールの小声のつぶやきばかり。不意にはるか遠くで、まるで天からひびいたような物音がする。それは弦<sup>つる</sup>の切れた音で、しだいに悲しげに消えてゆく。

ラネーフスカヤ なんだろう、あれは?

ロパーヒン 知りませんなあ。どこか遠くの鉱山で、ウインチ巻揚機の綱でも切れたんでしよう。しかし、どこかよっぽど遠くですなあ。

ガーエフ もしかすると、何か鳥が舞いおりたのかも知れん……あお蒼サギか何かが。……  
トロフィーモフ それとも、大ミミズクかな……

ラネーフスカヤ (身ぶるいして) なんだか厭な気持。(間)

フィールス あの不幸の前にも、やはりこんなことがありました。フクロウも啼なきたたえし、サモワールもひつきりなしに唸うなりましたつけ。

ガーエフ 不幸の前というと？

フィールス 解放令の前でございますよ。(間)

ラネーフスカヤ ねえ皆さん、うちへはいりましようよ、日が暮れてきたわ。(アーニヤに) まあ、涙なんか溜ためて……。どうかしたの、アーニヤ? (抱きよせる)

アーニヤ なんでもないの、ママ。ただ、ちよつと。

トロフィーモフ だれ誰か来る。

浮浪人が出てくる。古ぼけたヒサシ帽をかぶり、がいとう外套をまとい、少し酔っている。

浮浪人　ちよつとお尋ねしますが、ここをまつすぐ、停車場へ出られますかね？

ガーエフ　出られますよ。その道をお行きなさい。

浮浪人　ご親切に、おそれ入ります。　（咳せきばらいをして）まことによいお天気で……　（朗

読する）はらからよ、苦しみ悩むはらからよ。……出いでてみよ、ヴォルガのほとり、聞

ゆるは誰の呻うめきぞ。　（訳注　ネクラーツフの詩より）……　（ワーリヤに）マドモワゼル、

この飢えたるロシアの民に、三十コペイカほどどうぞ……

ワーリヤおびえて、声を立てる。

ロパーヒン　（憤然として）無作法にも程度というものがあるぞ。

ラネーフスカヤ　（怖おしけづいて）持つてらつしやい……さあ、これを……　（巾きんちやく着の中

をさがす）銀貨がないわ。……まあいい、さ、この金貨を……

浮浪人　ご親切に、おそれ入ります！　（退場）

笑い。

ワーリヤ（あきれて）わたし行くわ……あっちへ行くわ。……お母さまったら、うちの  
 人たちに食べさせる物が無いというのに、あんな男に金貨をやるなんて。

ラネーフスカヤ わたし馬鹿ばかなんだから、仕方がないわ！ うちへ帰ったら、わたしの手  
 持ちを残らず渡すからね。ロパーヒンさん、また貸してちょうだい！ ……

ロパーヒン 承知しました。

ラネーフスカヤ さあ行きましょう、皆さん、時刻ですわ。そうそうワーリヤ、さつきこ  
 こでね、お前の縁談をととのえましたよ、おめでとう。

ワーリヤ（涙ごえで）そんなこと、冗談冗談に仰おつしやるもんじやないわ、ママ。

ロパーヒン オフメーリア（訳注）オフィーリアをわざわざ、オストロフスキーの有名な  
 芝居の登場人物の名にもじったもの。この名は「一杯一杯きげん」の意味を含んでいるおか  
 しみがある）、ささ尼寺へ……

ガーエフ どうも手がふるえてならん、久しく玉突きをやらぬもんだから。

ロパーヒン オフメーリア、おお水妖ニソフよ。躬みが上も祈り添えてたもれ！

ラネーフスカヤ 行きましようよ、皆さん。そろそろお夜食よ。

ワーリヤ あの男のおかげで、ほんとにびつくりしたわ。胸がこんなにドキドキしている。ロパーヒン 念のため申しあげておきますが、皆さん、八月二十二日には桜の園は競売になります。お考えねがいますよ！ ……よくお考えをね！ ……

トロフィーモフとアーニヤのほか、一同退場。

アーニヤ (笑いながら) 浮浪人さん、ありがとう。ワーリヤをおどかしてくれたおかげで、やっと二人きりになれたわ。

トロフィーモフ ワーリヤはね、僕たちがもしや恋仲になりはしまいかと警戒して、毎日朝から晩まで、ああして付きつきりなんだ。あの人は、自分の狭い料簡りようけんで、われわれが恋愛を超越していることがわからないんだ。われわれの自由と幸福をさまたげている、あのけちくさい妄想もうそつを追っばらうこと、これが僕らの生活の目的であり意義なんです。進みましょう、前へ！ 僕らは、はるか彼方かなたに輝いている明るい星をめざして、まっしぐらに進むのだ！ 前へ！ おくれるな、友よ！

アーニヤ (手をたたいて) すてきだわ、あなたの話！ (間) 今日、ここはなんていい

んでしよう！

トロフィーモフ そう、すばらしい天気です。

アーニヤ あなたのおかげで、わたしどうかしてしまつたわ、ペーチャ。なぜわたし、前ほど桜の園が好きでなくなつたのかしら？ あんなに、うっとりするほど好きだったのに、——この世に、うちの庭ほどこい所はないと思つていたのに。

トロフィーモフ ロシアじゆうが、われわれの庭なんです。大地は宏こうだい大で美しい。すばらしい場所なんか、どつきりありますよ。（間）ね、思つてもご覧なさい、アーニヤ、あなたのお祖父じいさんも、ひいお祖父じいさんも、もつと前の先祖も、みんな農奴制度の讚さんび美者みやで、生きた魂を奴隷どれいにしてしほり上げていたんです。で、どうです、この庭の桜の一つ一つから、その葉の一枚一枚から、その幹の一本一本から、人間の眼めがあなたを見ていしませんか、その声があなたには聞えませんか？ ……生きた魂を、わが物顔にこき使つているうちに——それがあなたがたを皆、むかし生きていた人も、現在いきっている人も、すっかり墮落だらくさせてしまつて、あなたのお母さんも、あなたも、伯父おじいさんも、自分の腹を痛めずに、他人ひとのふとところで、暮くしていることにはもう気がつかない、——あなた方が控室より先へは通さない連中の、ふとこでね。（訳注 \*以下は上演

当時の検閲のため削除されたので、一九〇四年の初版本には、次のように言い換えられていた。——「ああ、怖ろしいことだ、お宅の庭は不気味です。晩か夜なかに庭を通り抜けると、桜の木の古い皮がぼんやり光つて、さも桜の木が、百年二百年まえにあつたことを夢に見ながら、重く重くうなされていような気がします。いやはや、ま

つたく！」）……われわれは、少なくとも二百年は後れています。ロシアにはまだ、まるで何一つない。過去にたいする断乎だんこたる態度ももたず、われわれはただ哲学をならべて、憂鬱ゆううつをかこつたり、ウオツカを飲んだりして居るだけです。だから、これはもう明らかじゃありませんか、われわれが改めて現在に生きはじめるためには、まずわれわれの過去をあがない、それと縁を切らなければならぬことはね。過去をあがなうには、道は一つしかない、——それは苦惱です。世の常ならぬ、不断の勤勞です。そこをわかつてください、アーニヤ。

アーニヤ わたしたちの今住んでいる家うちは、もうとうに、わたしたちの家じゃないのよ。だからわたし出て行くわ。誓つてよ。

トロフィーモフ もしあなたが、家政の鍵かぎをあずかつて居るのなら、それを井戸のなかへぶちこんで、出てらっしゃい。そして自由になるんです、風のようにね。



アーニヤ（感激して）それ、すばらしい表現だわ！

トロフィーモフ 信じてください、アーニヤ、僕を信じて！ 僕はまだ三十にならない、

僕は若い、まだ学生ですが、これですいぶん苦勞はして来ましたよ！ 冬になると、た

ちまち僕は口が乾<sup>ひ</sup>あがって、病みついて、いらいらして、乞食<sup>こじき</sup>も同然の境涯に落ちこん

で、——運命の追うがままに、所きらわずほつつき歩いたもんです！ それでもやつぱ

り僕の心は、夜も昼もたえず、いついかなる瞬間にも、一種なんとも言えぬ予感に満た

されていました。僕は幸福を予感します、アーニヤ、僕にはもうそれが見える……

アーニヤ（もの思わしげに）月が出たわ。

エピホードフが相変らず同じわびしい歌を、ギターで弾いているのが聞える。月がの

ぼる。どこかポプラの木のへんで、ワーリヤがアーニヤをさがしながら、「アーニヤ

！ どこにいるの？」と呼んでいる。

トロフィーモフ そう、月が出ました。（間）そら、あれが幸福です。もうやって来た、

だんだん近づいてくる。僕にはもう、その足音がきこえる。よしんば、僕たちにそれが

見つからず、ああこれだと悟る時がないにしても、それがなんです？ 誰かが見つけま

すよ！

ワーリヤの声 アーニヤ！ どこにいるの？

トロフィーモフ またワーリヤだ！ (忌々いまいましそうに) 厭になるなあ、まったく。

アーニヤ かまわないわ。川のほうへ行きましょうよ。あすこはよくつてよ。

トロフィーモフ 行きましょう。(ふたり歩きだす)

ワーリヤの声 アーニヤ！ アーニヤ！

—幕—

## 第三幕

アーチで奥の広間と区切られた客間。シャンデリアがともっている。次の間で、ユダヤ人の楽団の演奏がきこえる。二幕目に話に出たあれである。宵よい。広間ではグラン・ロン（訳注 大円舞）の最中。やがて《Promenade》《プロムナード》[a] 《ア》 en 《エヌ》 Paire 《パール》:」（訳注 一組ずつ行進!）というシメオーノフ＝ピーシチクの掛声がして、順々に舞台へ出てくる。——先頭の組はピーシチクとシャルロツタ、二番目はトロフィーモフとラネーフスカヤ夫人、三番目はアーニヤと郵便官吏、四番目はワリーヤと駅長、等々。ワリーヤは忍び泣きに泣いており、踊りながら涙をふく。最後の組にドウニヤーシヤ。

みなみな客間を一巡して広間へ。ピーシチクの掛声——《Grand》《グラン》 rond 《ロ  
ン》, balancez 《バランセ》:」（訳注 大円陣、みぎ左へ!）《Les》《レ》 [cavalier  
sa] genoux 《ジヌムー》 et 《エ》 remerciez 《ルメルシエ》 vos 《ヴォ》 dames 《タ  
ーム》:」（訳注 騎士はひざまずいて、貴婦人に謝意を表わす!）

フィールスが燕尾服すがたで、炭酸水を盆にのせて持って出る。客間にピーシチクとトロフィーモフ登場。

ピーシチク わたしはどうも多血質でね、もう二度も卒中にやられているもんで、踊りはどだい無理なんだが、下世話にもいうとおり、おつきあいなら吠えないまでも、せめて尻尾を振るがよい——だからな。丈夫なことといったら、わたしは馬もはだしき。わたしの亡くなった親父は、剽軽な人だったが、——天国に安らわせたまえ——うちの家系のこと、こんなことを言っていたつけ。このシメオーノフⅡピーシチクという古い家柄は、どうやらあのカリグラ皇帝（訳注 ローマ三代目の皇帝。暴君で、自分の愛馬に元老院の議席を与えたりした）が元老院の議席につけた例の馬から出ているらしい、とさ。……（腰かける）だが、困ったことには、金がない！ かつえた犬には肉こそ黄金、といつてな。……（いびきをかき、すぐまた目を覚ます）わたしもそれさ……金のことしか頭にないのさ……

トロフィーモフ そう言えば、あなたの格好には、実際なにか馬に通ずるところがありま

すね。

ピーシチク なあに……馬はいい獣だ……だいいち売れるからな……

となりの部屋で、玉突き音がする。広間のアーチの下に、ワーリヤが姿を見せる。

トロフィーモフ（からかつて）マダム・ロパーヒン！ マダム・ロパーヒン！ ……

ワーリヤ（ムツとして）禿げの旦那！

トロフィーモフ いかにも、僕は禿げの旦那だ、それを誇りとしてるんだ！

ワーリヤ（くよくよ案じながら）楽隊をやとったりして、払いはどうするつもりかしら？（退場）

トロフィーモフ（ピーシチクに）あなたが一生のあいだに利子を払う金の工面に費やしたエネルギーが、何かもしほかのことに向けられたとしたら、おそらくあなたはどこのつまり、地球をひっくり返すこともできたろうになあ。

ピーシチク ニーチェがね……哲学者の……誰しらぬ者もない、えら物ちゆうのえら物の……あのすごい知恵者がな、その著述のなかで、にせ札は作ってもいいとか言っている

が。

トロフィーモフ あなたは、ニーチエを読んだんですか？

ピーシチク いや、なに。……うちのダーシエンカが話してくれたのさ。ところで現在わ

たしは、ええ一つ、にせ札でも作ってやろうか、といった土壇場どたんばでな。……あさつて三

百十ルーブリ払わにやならん……百三十はやつとできたが……（ポケットをさわってみ

て、あわてて）金がなくなつた！金を落したぞ！（泣き声で）どこへ行つたんだろ

う？（嬉しうれそうに）ああ、あつた、服の裏へもぐりこんでいた。……やれやれ、冷汗

が出たわい……

ラネーフスカヤとシャルロット登場。

ラネーフスカヤ（コーカサスの舞曲を口ずさむ）レオニードは、どうしてこう遅いのだ

ろう？町で何をしているのかしら？（ドウニヤーシヤに）ドウニヤーシヤ、楽隊の

人にお茶をあげて……

トロフィーモフ 競売はお流れになつたんですよ、きつとそうです。

ラネーフスカヤ 楽隊の来たのも折が悪かったし、舞踏会も生憎あいにくの時に開いたものだけ。  
 ……まあ、いいさ。……（腰かけて、そつと口ずさむ）

シャルロツタ （ピーシチクにカードを一組わたす）さあ、カードを一組あげましたよ。

どれか一枚だけ、頭のなかで考えてください。

ピーシチク 考えました。

シャルロツタ では、よく切ってください。大そう結構。こちらへ頂かしてください、お

お、いとしいピーシチクさん。アイツツワイドライ一、二、三！ さあ、捜してごらん下さい、その札はあ

なたの脇わきポケットにあります……

ピーシチク （脇ポケットからカードを取りだす）スペードの八、まさにその通り！

（驚嘆して）こりや、どうだ！

シャルロツタ （手の平にカードを一組のせて、トロフィーモフに）早く言ってください、

一ばん上のカードは？

トロフィーモフ なにさ？ じゃ、スペードのクイン。

シャルロツタ はい！（ピーシチクに）では？ 一ばん上のカードは？

ピーシチク ハートのエース。

シャルロット はい！ ……（手の平を打つ、カードの一組きえ失せる）さて、今日はなんていいお天気でしょう！（不可思議な女の声が、さながら床下からひびくように答える、——「ええ、ほんとに、いいお天気ですこと、奥さん」）あなたは、なんとも申しぶんのない、わたしの理想の人よ。 ……（声、——「わたしも、奥さん、あなたが大好きです」）

駅長（拍手する）よう、腹話術の名人、ブラヴオー！

ピーシチク（驚嘆して）こりや、どうだ！ いや、あなたは魔女か妖精か、シャルロットさん …… わしはすっかりあなたに惚れましたよ ……

シャルロット 惚れたですって？（肩をすくめて）あなたに恋ができました？ Guter

《グータ》 Mensch 《メンシ》, aber 《アーバ》 schlechter 《シレヒタ》 Musikant 《ムジカント》（訳注 ドイツ語。「人はいいが音楽は下手」）

トロフィーモフ（ピーシチクの肩をたたいて）まったく、なんて馬だろう、あなたは ……

シャルロット では皆さん、もう一番、手品をご覧に入れます。（椅子から格子縞の膝掛けを取る）これは飛びきり極上の羅紗でございます、これをお売りたいします ……



(振つてみせる) 買いたい方はありませんか?

ピーシチク (驚いて) こりやどうだ!

シャルロツタ アイン・ツワイ・ドライ! (おろした布をパツと上げる。布のうしろに

アーニヤが立っている。彼女は膝をかがめて会<sup>えしやく</sup>釈をして、母親へ走り寄り、抱擁して、

満座熱狂のうちに広間へ駆けもどる)

ラネーフスカヤ (拍手して) ブラヴオー、ブラヴオー! ……

シャルロツタ では、もう一番! アイン・ツワイ・ドライ! (布を上げると、うしろ

にワリーヤが立って、おじぎをする)

ピーシチク (驚いて) こりや、どうだ!

シャルロツタ はい、おしまい! (布をピーシチクに投げかけ、膝をかがめて会釈し、

広間へ走り去る)

ピーシチク (いそいで追いかけながら) この悪者……いやはや! なんとという! (退

場)

ラネーフスカヤ でも、レオニードはまだね。何を町でぐずぐずしてるんだらう、変だこ

と! 領地が売れたにしろ、競売がお流れになったにしろ、どっちみちケリがついてい

るはずなのに、なんだっていつまでも知らせてくれないのかしら！

ワーリヤ （なだめようと懸命に）伯父さんが落札なすったのよ、きつとですわ。

トロフィーモフ （冷笑的に）なるほどね。

ワーリヤ おばあさんから伯父さんへ、委任状が来ましたのよ——おばあさんの名義で買  
い戻して、借金は肩代りにするようにつて。アーニヤのために計らつてくださつたんで  
すわ。だからわたし、それが神さまに通じて、伯父さんが落札なさるに違いないと思  
うの。

ラネーフスカヤ ヤロスラーヴリのおばあさまが、ご自分の名義で領地を買うようにつて、  
送つてくださったお金は一万五千ルーブリなのよ、——わたしたち信用がないんだわ、  
——そんなお金じゃ、利子の払いにも足りやしない。（両手で顔をおおう）今日こそ、  
わたしの運命のきまる日よ、運命の……

トロフィーモフ （ワーリヤをからかう）マダム・ロパーヒン！

ワーリヤ （怒つて）万年大学生！ 二度ももう、大学を追い出されたくせに。

ラネーフスカヤ 何をおこるのさ、ワーリヤ？ この人が、ロパーヒンのことでお前をか  
らかつたつて、それがなんですか？ 嫁きたければ——ロパーヒンの嫁になるがいいわ。

あれは見どころのある、いい人間だもの。いやなら——嫁かないがいいのさ。誰もお前を、束縛しやしない。……

ワーリヤ わたし正直に言えば、このことは真剣に考えていますの。あの人はいい人間で、わたし好きですわ。

ラネーフスカヤ じゃ、嫁いつたらいいじゃない。何を待つことがあるの、気が知れないわ！

ワーリヤ だって、お母さん、自分であの人に申込みをするわけには行きませんもの。現にこの二年というもの、みんながわたしに、あの人のことを言うの、寄ってたかってね。ところがあの人は、黙っているか、冗談にまぎらしてしまうかですの。それもわかるわ。あの人はますますお金ができて、事業で忙しくて、わたしどころじゃないのよ。もしもわたし、お金があつたら、——たとえ少しでも、せめて百ルーブリでもあつたら、わたしは何もかもうつちやつて、身をかくしてしまうわ。尼寺へはいつてしまうわ。

トロフィーモフ そいつはすばらしい！

ワーリヤ (トロフィーモフに) 大学生は、もう少し利口なものよ！ (口調を柔らげて、泣き声で) なんてあなた、風采ふうさいが落ちたの、ペーチャ、なんて老ふけてしまったのよ！

（もう泣かずに、ラネーフスカヤ夫人に）ただね、こうして仕事をしないのが辛い<sup>つら</sup>のよ、ママ。わたし、一分一秒、何かせずにはいられないの。

ヤーシヤ登場。

ヤーシヤ（やつと笑いをこらえながら）エピソードが、<sup>キ</sup>撞球棒を折りました！ ……

（退場）

ワリーヤ なんだってエピソードがいるの？ 誰があれに、玉突きをしろと言いました

？ あの人の気が知れないわ。……（退場）

ラネーフスカヤ あの子をからかわないでね、ペーチャ、ただでさえ、苦勞の多い子なんですから。

トロフィーモフ お節介すぎますよ、あの人は、ひとの事にまでくちばしを入れたりして。

この夏じゆう、僕もアーニヤもじつに悩まされた、——ふたりの間にロマンスでも起りやしないかと、それがあのひと心配で堪<sup>たま</sup>らないんです。あの人の知ったことですか？ おまけに僕は、そんな気振<sup>けふ</sup>りも見せないのにね。僕はそれほど俗悪じやありませんよ。

われわれは恋愛を超越してるんです！

ラネーフスカヤ　じゃ、きつと、わたしは恋愛以下なのね。（はげしい不安に駆られて）

レオニードはどうしたんだろう？　領地が売れたかどうか、それだけでもわかればねえ

！　わたし今度の災難が、あんまり嘘うそみたいだもんだから、何を考えたものやら、見当

さえつかずに、ぼおつとしているの。……今にもわたし、大声でわめきだすか……何か

馬鹿ばかなまねをしそうだわ。わたしを助けて、ペーチャ。何か話をしてちょうだい、ね、

何か……

トロフィーモフ　領地が今日売れようと売れまいと——同じことじゃありませんか？　あ

れとはもう、とつくに縁が切れて、今さら元へは戻りません、昔の夢ですよ。気を落ち

つけてください、奥さん。いつまでも自分をごまかしていずに、せめて一生に一度でも、

真実をまともに見ることで。

ラネーフスカヤ　真実をねえ？　そりやあなたなら、どれが真実でどれがウソか、はつき

り見えるでしょうけれど、わたし、なんだか眼めが霞かすんでしまったみたいで、何一つ見え

ないの。あなたはどんな重大な問題でも、勇敢にズバリと決めてしまいなさるけれど、

でもどうでしょう、それはまだあなたが若くって、何一つ自分の問題を苦しみ抜いたこ

とがないからじゃないかしら？　あなたが勇敢に前のほうばかり見ているのも、元をただせば、まだ本当の人生の姿があなたの若い眼から匿かくされているので、怖いものなしなんだからじゃないかしら？　わたしたちに比べれば、あなたはずっと勇敢で、正直で、深刻だけれど、もつとよく考えてね、爪つめの先ほどでもいいから寛大な気持になって、わたしを大目に見てちょうだい。だってわたしは、ここで生れたんだし、お父さんもお母さんも、お祖父じいさんも、ここに住んでいたんですもの。わたしはこの家がしんから好きだし、桜の園のないわたしの生活なんか、だいいち考えられやしない。どうしても売らなければいけないのなら、いつそのわたしも、庭と一緒に売ってちょうだい。……

（トロフィーモフを抱きしめて、その額にキスする）坊やもここで、溺おぼれ死んだんですものね。……（泣く）わたしを哀れと思って、ね、あなたは親切な、いい人ですもの。

トロフィーモフ　ぼくが心しんから同情してること、ご存じじゃないですか。

ラネーフスカヤ　そんならそれで、何かもつと、別の言い方があるはずだわ。……（ハンカチを取りだす拍子に、電報がゆかへ落ちる）わたし今日は気が重くてならない。この気持、とてもあなたにはわからないわ。ここは騒々しくって、物音一つすることに、胸がドキリとする。からだじゅう、ふるえてくる。でも、居間へ引っこむわけにもいかな

い。静かなところに、一人でいるのはやりきれないもの。わたしを責めないでね、ペーチャ。……わたしあなたが好きで、他人のような気がしない。あなたになら、わたし喜んでアーニヤを上げるわ、ほんとによ。でもただね、あなたは勉強しなくちゃ駄目、卒業しなくちゃね。あなたはなんにもせずに、運命のままにふらふらしてなさるけれど、ほんとに妙だわ。……そうじゃなくて？　ね？　それに、その顎ひげだつて生やすなら生やすで、も少しなんとかしなくちゃねえ。……（笑う）可笑しな人！

トロフィーモフ（電報を拾つて）僕は好男子になりたかありません。

ラネーフスカヤ　これ、パリから来た電報なの。毎日くるのよ。きのうも今日も。あのガムシヤラ屋さんは、また病気になつて、工合がわるいの。……どうぞ赦してくれ、どうぞ帰つて来てくれ、と言うんだけど、考えてみればやっぱり、わたしパリへ行つて、あの人のそばにいてやるのが本当なのね。あなたは、むずかしい顔をしてるけれど、ねえペーチャ、わたし、どうしようもないじゃないの！　あの人は病気で、一人ぼつちで、辛い目にあつてるといふのに、誰があの人のお世話をするの、誰があの人にケガのないようにお守りをするの、誰が時間どおりに薬をのませるの？　今さら包みかくしたところでしょうか、わたしあの人を愛しています、そりや明白よ。愛している、愛して

ますとも。……それはわたしの頸くびに結えつけられた重石おもしで、その道づれになつてわたしは、ぐんぐん沈んで行くけれど、やつぱりその重石が思いきれず、それがないじゃ生きて行けないの。(トロフィーモフの手を握る) 悪く思わないでね、ペーチャ、わたしに何も言わないで、ね、言わないで……

トロフィーモフ (涙なみだごえで) 率直に言わせてください、お願いです。あの男は、あなたからすっかり捲まきあげたじやないですか!

ラネーフスカヤ いや、いや、いや、それを言わないで…… (両耳をふさぐ)

トロフィーモフ あいつは碌ろくでなしです、それを知らないのはあなただけだ! あいつはケチなやくぎ野郎で、虫けらみたいな……

ラネーフスカヤ (ムツとするが、じつところえて) あなたは二十六か七のはずね。だのに、まるで中学の二年生みたい!

トロフィーモフ かまやしません!

ラネーフスカヤ もつと大人にならなけりや駄目よ。あなたの年になれば、恋をする人の気持ぐらい、わからなければね。そして自分も恋をしなくてはね……夢中になつてね!

(腹はらだたしげに) そうよ、そうですとも! あんただって、純潔なんかあるもんです



か。ただ気どつてるだけよ、滑稽こっけいな変り者よ、片輪よ……

トロフィーモフ (呆気あっけにとられて) 何を言うんだ、この人は！

ラネーフスカヤ 「恋愛を超越してる」ですって！ 超越するどころか、あんたはうちの  
フィールスの言うように、この出来そこねえめ、ですよ。その年をして、恋人ひとりい  
ないなんて！ ……

トロフィーモフ (仰天して) こりゃ、ひどい！ 何を言い出すんだ (頭をかかえて、

広間へ急ぐ) まったくひどい。……とてもたまらん、僕は行こう…… (退場。しかしす  
ぐ戻って来て) もうあなたとは絶交です！ (次の間へ退場)

ラネーフスカヤ (うしろから叫ぶ) ペーチャ、待ってちょうだい！ おかしな人ね、ち  
よつと冗談いっただけじゃないの！ ペーチャ！

次の間の階段を、誰かが大急ぎで登って行く足音がし、とつぜんドシンと落ちる音が  
する。アーニヤとワーリヤの叫び声。しかしすぐ笑い声になる。

ラネーフスカヤ おや、どうしたんだろう？

アーニヤが駆けこむ。

アーニヤ（笑いながら）ペーチャがね、階段から落っこちたの！（走り去る）

ラネーフスカヤ　なんておかしな人だろう、あのペーチャは……

駅長が広間の真ん中に立ちどまって、A・K・トルストイの『罪の女』（訳注　ロシ  
ア十九世紀の詩人・劇作家トルストイの叙事詩。次にその数行を例示する。——「若  
き罪の女は、杯をほしつ、／その間に坐せり。／そのきらびやかによそおいは／人  
みなの目をうぼう、／その毒々しき髪かざりは／罪の女のなりわいを語る」）を朗読  
する。一同謹聴するが、何行も読まないうちに次の間からワルツのひびきが流れてき  
て、朗読は中絶する。一同おどる。次の間から、トロフィーモフ、アーニヤ、ワーリ  
ヤ、ラネーフスカヤが出てきて、舞台にかかる。

ラネーフスカヤ　ねえ、ペーチャ……その純潔な心で、わたしを赦してちょうだい、……

さ、一緒に踊りましょう。……（ペーチャと踊る）

アーニヤもワーリヤも踊る。

フィールスがはいつてきて、自分の杖を横手のドアのそばに立てかける。ヤーシヤも客間からはいつて来て、ダンスを見物する。

ヤーシヤ どうした、爺さん？

フィールス 加減がわるくてな。昔はうちの舞踏会といやあ、將軍さまだの男爵だの提督閣下だのが踊りに来なすつたもんだが、それが今じや、郵便のお役人だの駅長だのを迎えにやつて、それさえいい顔をして来やしない。どうもわしも、めつきり弱くなつたよ。亡くなつた大旦那さまは、みんなの病気を、いつも封蝨で療治なすつたものだ。今でもわしは、毎にち封蝨をのんでるが、これでもう二十六年か、その上にもなるかな。わしがこうして生きているのは、そのおかげかも知れんて。

ヤーシヤ お前さんの話にも、あきあきするよ、爺さん。（あくび）いつそさつさと、くたばつちまえばいいなあ。

フィールズ ええ、この……出来そこねえめが！  
(ぶつぶつつぶや眩く)

トロフィーモフとラネーフスカヤが広間で踊り、やがて客間で踊る。

ラネーフスカヤ ありがとう《メルシ》。わたし、ちよつと休みます。……(腰かける)  
疲れたわ。

アーニヤ登場。

アーニヤ (わくわくして) いま台所で、どこかの人が、桜の園は今日、売れてしまった  
と話していたわ。

ラネーフスカヤ <sup>だれ</sup>誰が買ったの。

アーニヤ 誰とも言わずに、行ってしまったの。(トロフィーモフと踊る。ふたり広間へ  
去る)

ヤーシヤ それはね、どこかの爺さんがしやべってたんでさあ、よそもんでしたがね。

フィールズ 旦那さまは、まだ見えない、まだお帰りが無い。外套がいとうは、薄い合着を召してお出かけだったが、もしや風邪でもお引きにならないけりやいいが、いやはや、若い人というもんは！

ラネーフスカヤ わたし、今にも死にそうだ。ヤーシャ、向うへ行つて聞いてきておくれ、誰が買ったのだから。

ヤーシャ でも、とつくに行つてしまいましたよ、その爺さんは。(笑う)

ラネーフスカヤ (いささかムツとして) まあ、何を笑うの、お前は？ 何が嬉しいの？

ヤーシャ あんまり、エピソードのやつがおかしいもんで。いや、つまらん男で。二十  
二の不仕合せ。

ラネーフスカヤ フィールズ、この領地が売れてしまったら、おまえどこへ行くつもり？  
フィールズ 仰おほせのままに、どこへでも参ります。

ラネーフスカヤ お前、どうしてそんな顔をしてるの？ 加減でも悪いの？ 向うへ行つて、やすんだらどう？ ……

フィールズ へえ。……(にやりと笑つて) そりや、さがつて休むのも宜よろしいけれど、あ  
とは誰が給仕をいたします。誰が采配を振ります？ うちじゆうに、一人でございます

よ。

ヤーシヤ　（ラネーフスカヤ夫人に）奥さま！　じつはお願いの筋がありますんですが、どうぞお聞きになってください！　もしまたパリへお出かけになるようでしたら、後生でございます、わたしにお伴ともさせてくださいまし。ここにおりますことは、絶対に不可能なんです。　（あたりを見まわし、声をひそめて）今さら申上げるまでもなく、ご自身とうにご存知のとおり、何しろ無教育な国で、民衆は品行がわるいし、それに退屈で、お勝手の食べ物ときたら目もあてられませんし、おまけにあのフィールスのやつが、うろうろしておって、色々と愚にもつかんことを、ぼそついておりますしねえ。わたしをお連れくださいまし、お願いでございます！

ピーシチク登場。

ピーシチク　どうぞ奥さん……ワルツを一番ねがいます……　（ラネーフスカヤ、彼と歩きだす）天女のような奥さん、とにかく百八ルーブリは拝借しますよ……。ぜひ拝借しますよ……。　（踊る）百八ルーブリ……。　（広間へ移る）

ヤーシヤ（そつと口ずさむ）「きみ知るや、わが胸のこの痛み……」

広間で、灰色のシルクハットに格子こうしじまのズボンをはいた人物が、両手を振ったり跳ねあがったりする。「ブラヴオー、シャルロツタさん、大出来、シャルロツタさん！」と口ぐちに叫ぶ。

ドウニヤーシヤ（立ちどまって、白粉おしろいをはたく）お嬢さまったら、あたしにも踊れつて仰おっしやるのよ——殿がたは大勢なのに、婦人が少ないからって。——でもあたし、踊つたおかげで目まいがするわ、心臓がどきどきするわ。ちよいとフィールスさん、今しがた郵便のお役人さんが、あたしに大変なことを仰しやったの、あたし息がとまりそうになつちやつた。

音楽がしずまる。

フィールス　なんと仰しやったかい？

ドウニヤーシャ あんたは花のようだ、ですって。

ヤーシャ (あくび) 無学な連中だ…… (退場)

ドウニヤーシャ 花のようだ、ですって。……あたし、そりやデリケートな娘だもので、  
うっとりするような言葉が大好き。

フィールズ そろそろおっぱじめるな、お前さんも。

エピホードフ登場。

エピホードフ ああ、ドウニヤーシャさん、あなたは僕ぼくを見るのが、さも厭いやそうですね…

…虫けらかなんぞのように。(ため息をつく) あわれ人生よ、だ！

ドウニヤーシャ 何のご用ですの？

エピホードフ もちろんそりや、あなたの方が正しいのかも知れない。(嘆息する) しか

し無論ですな、その……ある観点からすると、あなたという方は、まあ率直に言わせて  
頂くとですな、要するに僕を、こんな精神状態に落し入れてしまったと、あえて言わざ  
るを得んのです。僕は自分の宿命を承知している。僕の身には、毎日かならず何かしら



不仕合せが起るし、僕はもうとうに馴れっこになって、おのれが運命を微笑をもって眺めていきます。要するにですな、あなたは一たん約束された。で、よしんば僕が……

ドウニヤーシャ どうぞそのお話は、のちほどに願いますわ。今はあたしを、そつとしておいてちょうだい。だって、空想してるんですもの。（扇をもてあそぶ）

エピソードフ 僕は毎日不仕合せにぶつかります。しかし僕は、あえて言えばですな、ただ微笑しています、いや、ハツハツハと笑つてさえいます。

――広間からワーリヤ登場。

ワーリヤ お前まだここにいたの、エピソードフ？ ほんとに、なんていい加減な人間だろう。（ドウニヤーシャに）お前もあつちへおいで、ドウニヤーシャ。（エピソードフに）玉突きをしてキューを折つたかと思えば、お客さま面づらをして客間を歩きまわつたりして。

エピソードフ こう申しては失礼ですが、あなたからお小言を頂く筋合いはありません。ワーリヤ 小言なんか言つてやしない、話をしているんだよ。することと言つたら、仕事

はそつちのけで、ふらふら歩きまわることばかり。せつかく執事をやとつても、なんのためやら——わかりやしない。

エピホードフ（ムツとして）わたしが仕事をしようとして、歩きまわろうと、食べようとして、玉を突こうと、それについてとやかく仰しやれるのは、物のわかつた人が目上のかただけですよ。

ワリーヤ よくも言えたね、わたしにそんなことが！（カツとなつて）言つたわね？

つまりわたしが、わからずやだと言うんだね？ とつとと出てくがいい！ さあ今すぐ！

エピホードフ（おしげ怖気づいて）もう少々その、デリケートな言葉で、どうぞ。

ワリーヤ（われを忘れて）さつさと出てけつたら！ さ、出てけ！（エピホードフが

ドアの方へ行くのを、彼女は追う）二十二の不仕合せめ！ お前のおいがプンとでもしたら承知しないよ！ 二度とその顔を見せてもらうまい！（エピホードフ退場。ド

アの向うで、「あなたのことを、言いつけますからね」という彼の声がある）おや、また返つて来るんだね？（フィールスがドアのそばに立てかけておいた杖をつかむ）さ

あ来い……来るならおいで、目にももの見せてやるから。……来るんだね？ え、来るん

だね？ よおし、こうしてやる……（杖をふりあげる、とたんにロパーヒン登場）

ロパーヒン これはどうも恐縮。

ワリーヤ （怒りと嘲笑をまぜて）失礼！

ロパーヒン どうしまして。結構なご馳走で、あつくお礼を。

ワリーヤ 礼には及びません。（その場から離れ、やがて振りかえって、やさしく尋ねる）

お怪我はなかつたかしら？

ロパーヒン いや、なあに。もつとも、でっかい瘤ぐらいできそうですがね。

広間の声々 ロパーヒンが来た！ ロパーヒンさんだわ！

ピーシチク いよう、これはこれは、ようこそご入来……（ロパーヒンにキスする）この可愛い男は、ちよつぴりコニヤツクの匂いにするな、おい君。われわれもこの通り、

愉快にやつとるよ。

ラネーフスカヤ夫人登場。

ラネーフスカヤ まあ、あなたでしたの、ロパーヒンさん？ どうしてこんなに遅かった

の？ レオニードはどうしまして？

ロパーヒン お兄さまも、一緒に戻もとられました。すぐ見えます……

ラネーフスカヤ （わくわくしながら）で、どうでしたの？ 競売はありまして？ さ、

話してちょうだい！

ロパーヒン （嬉しさを外へ出すまいとして、しどろもどろに）競売は四時ちかくに終わりました。……わたしたちは汽車に乗りおくれたもので、九時半まで待たにやらなかつたんです。（苦しそうに息をついて）ふうっ！ すこし頭がぐらぐらする……

ガーエフ登場。右手には買物をさげ、左手で涙をふいている。

ラネーフスカヤ リョーニヤ、どうだったの！ ねえ、リョーニヤ！（じりじりして、

涙ぐんで）早くして、後生だから……

ガーエフ （一言も答えず、ただ片手を振る。泣きながらフィールズに）これを取ってくれ。……アンチョビイと、ケルチ（訳注 クリミア半島の東端）のニシンとだ。……わたしは今日、なんにも食べなかつたよ。……ああ、まったくひどい目に会った！（玉

突き部屋へのドアがあいていて、球の音と、ヤーシヤが「七と十八！」という声がきこえる。ガーエフの表情が變つて、もう泣かずに（いやもう、へとへとだ。なあフィールス、着がえさせてくれ。（広間を抜けて自分の居間へ去る。フィールスつづく）

ピーシチク どうだったね、競売は？ 話してくれよ、さあ！

ラネーフスカヤ 売れたの、桜の園は？

ロパーヒン 売れました。

ラネーフスカヤ 誰が買ったの？

ロパーヒン わたしが買いました。（間）

ラネーフスカヤ夫人、がつくりとなる。もし肘ひじかけ椅子いすとテーブルのそばに立っていないなかつたら、倒れたにちがいない。ワーリヤはバンドから鍵かぎ束たばをはずし、それを客間中央の床へ投げつけて退場。

ロパーヒン わたしが買ったんです！ ちょっと待ってください、皆さん、お願いします。

わたしは頭がぼおつとしてしまって、ものが言えないんです。……（笑う）わたしたち

が競売場に着いてみると、デリガーノフはもう来ていました。ガーエフさんには、たった一万五千しかないのに、あのデリガーノフはいきなり、抵当額の上に三万と吹っかけてきました。こいつはいかんと思つて、わたしはやつを向うにまわして、四万と打つて出た。向うは四万五千とくる。そこでこっちは五万五千。つまり、やつは五千ずつ上げてくるのに、わたしは一万ずつ上げて行つた。……やがて、ケリがついた。抵当額の上に、わたしは九万と踏んばつて、まんまと落したんです。桜の園は、もうわたしのものだ！ わたしのもものなんだ！（からからと笑う）ああどうしたことだ、皆さん、桜の園がわたしのものだなんて！ 言いたいなら言うがいい、わたしが酔つていても、気が変だとしても、夢を見てるんだとしても……（足を踏み鳴らす）わたしを笑わないでください！ うちの親父おやじや祖父じいさんが、墓の下から出てきて、この始末を見たらどうだろう。あのエルモライが、なぐられてばかりいた、字もろくすっぽ書けないエルモライが——冬でもはだしで駆けまわつていたあの餓鬼が、まぎれもないそのエルモライが、世界じゆうに比べものもない美しい領地を、買ったのだ。そこでは親父も祖父さんもどれい奴隷だった、台所へさえ通しちやもらえなかつた、その領地をわたしが買ったのだ。わたしが寝ぼけてるって、ただの夢だつて、……気の迷いだつて、……とんでもない、それこ

そあなたがたの得手勝手な想像の、無知のやみに包まれた産物なのだ。……（鍵束を拾いあげ、うっとりほほえみながら）鍵を投げてつたな。もうこの主婦ではないというところを、見せようっていうんだな。……（鍵束をがちやつかせる）ふん、まあどつちでもいい。（オーケストラの調子を合せる音がきこえる）おおい、楽隊、やってくれ、おれが聴いてやるぞ！ みんな来て見物するがいい、このエルモライ・ロパーヒンが桜の園に斧をくわわせるんだ、木がばたばた地面へ倒れるんだ！ どしどしここへ別荘を建てて、うちの孫や曾孫のやつらに、新しい生活を拝ませてやるぞ。……楽隊、やってくれ！

音楽がはじまる。ラネーフスカヤ夫人は椅子に沈みこんで、はげしく泣く。

ロパーヒン（責めるように）一体なぜ、なんだってあなたは、わたしの言うことを聴かなかったんです？ わたしの大事な奥さん、お気の毒ですが、今となってはとり返しがつきません。（涙ぐんで）ああ早く、こんなことが過ぎてしまえばいい。なんとかして早く、今のようながたびしした、面白くもない生活が、がらりと変ってしまえばいい。

ピーシチク（彼の腕をかかえて、小声で）この人は泣いてるよ。な、広間へ行こう、一人にしてあげたほうがいい。……行こうや。……（腕をかかえて。広間へ連れ去る）

ロパーヒン どうしたんだ？ 楽隊、しつかりやらんか！ なんでも、おれの注文どおりやるんだ！（皮肉に）新しい地主のお通りだ、桜の園のご主人さまのな！（うっかり小テーブルにぶつかり、枝付燭しよくだい台たいをひっくり返しそうになる）なんでも代は払ってやるぞ！（ピーシチクとともに退場）

広間にも客間にも、ラネーフスカヤ夫人のほか誰もいない。彼女は腰かけたなり、全身をすぼめて、はげしく泣いている。ひそやかな奏楽の音。いそぎ足でアーニヤとトロフィーモフ登場。アーニヤは母のそばへ寄り、その前にひざまずく。トロフィーモフは、広間の入口に立つ。

アーニヤ ママ！ ……泣いてらっしゃるの、ママ？ いとしい、親切な、やさしい、ママ。わたしの大事なママ、わたしあなたを愛していますわ。……わたし、お祝いを言いたい。桜の園は売られました、もうなくなってしまうました。それは本当よ、本当よ。



でも泣かないでね、ママ、あなたには、まだ先の生活があるわ。そのやさしい、清らかな心もあるわ。……さ、一緒に行きましょう、出て行きましょうよ、ねえ、ママ、ここから！ ……わたしたち、新しい庭を作りましょう、これよりずっと立派なのをね。それをご覧になったら、ああそうかと、おわかりになるわ。そして悦びが——静かな、ふかい悦びが、まるで夕方の太陽のように、あなたの胸に射さしこんできて、きつとニッコリお笑いになるわ、ママ！ 行きましょう、ね、大事なママ！ 行きましょうよ！ ……

——幕——

## 第四幕

舞台は第一幕に同じ。ただし窓のカーテンも壁の面もなく、残っている僅かの家具も一隅いちぐうに積みかさねられて、さしずめ売物とでもいった形。がらんとした感じがする。出口のドアのそばと舞台の裏とに、トランクや旅行用の包みなどが、積みかさねてある。左手のドアは開けはなしで、そこからワリーヤとアーニヤの声がきこえる。

ロパーヒンが立って、待ち受けている。ヤーシヤは、シャンパンのついでである小さなグラスを並べた盆をささげている。次の間ではエピソードが、箱に縄なわをかけている。舞台裏手で、がやがやいう声。百姓たちが、お別れに来ているのだ。ガーエフの声で、

「いやありがとう、みんな、どうもありがとう」

ヤーシヤ 下じもの連中が、お別れにやって来た。わたしはね、こういう意見なんです、ロパーヒンさん、民衆は善良だけれど、どうも物わかりが悪いとね。

騒ぎが静まる。次の間を通過して、ラネーフスカヤとガーエフが登場。彼女は泣いては  
いないが、真<sup>ま</sup>つ蒼<sup>さお</sup>で、顔がびくびくふるえて、口が利<sup>き</sup>けない。

ガーエフ お前はあの連中に、財布をやっちまったね、リユーバ。それじゃいかん！ そ  
れじゃいかんよ！

ラネーフスカヤ わたし駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>なの！ わたし駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>なんだもの！

ふたり退場。

ロパーヒン (ドアの口から、ふたりの後ろへ) どうぞこちらへ、お願いします！ お別  
れにほんの一杯。うっかり町から持って来るのを忘れたもので、停車場でやっと一本だ  
け見つめました。さあどうぞ！ (間) これは、皆さん！ おいやですか？ (ドアの  
口から離れる) そうと知ったら——買うんじゃなかった。じゃ、わたしも飲むのはよそ  
う。(ヤーシヤは用心しいしい盆をテーブルに置く) ヤーシヤ、せめてお前でも飲んで  
くれ。

ヤーシヤ 旅立ちを祝します！ 残られる方がたもご息災で！ （飲む）このシャンパン

は、本物じゃありませんぜ。うけあいできあ。

ロパーヒン 一本ハループリしたがな。（間）ここは、やけに寒いなあ。

ヤーシヤ 今日たは焚たかなかつたんでね、どうせ行ちちまうんですからね。（笑う）

ロパーヒン 何ながおかしいんだ？

ヤーシヤ ついうれ嬉うれしくつてね。

ロパーヒン もう十月だというのに、そとは日が照あって、おだやかで、まるで夏なつみたいだ。

普ふしん請しんには打うつてつげだな。（時計を出してみて、ドアの口へ）皆さん、よろしいですか、

発車はつしやまでに四十七分しよじふしちぶんしかありませんよ！ すると、二十分じふぶんしたら停車場ていじやばへお出でかけにな  
るわけです。少々せうせうお急いそぎ願ねがいますよ。

トロフィーモフが、外がいとう套とうをきて外がいとうからはいつてくる。

トロフィーモフ そろそろ出でかける時間じかんらしいな。馬車ばしやも来きている。だが癩しやくだな、僕ぼくのオ

ーバーシユーズはどこなんだ。消きえてなくななつちまったよ。（ドアの口へ）アーニヤ、

ぼくのオーバーシューズがないんです！ 見つからないんです！

ロパーヒン わたしは、ハリコフへ行かなければならん。君たちと同じ汽車にするよ。ハリコフで、この一冬こすのさ。わたしはだいたい長いこと、おつきあいでぶらぶらして、仕事にならんで閉口したよ。働かずにやられない性分だね、第一この両手の始末にこまるんだ。なんだか妙にこうブランブランして、まるで他人の手みたいだ。

トロフィーモフ おつつけ、みんな行つちまいますよ。そこでまた有益な事業とやらに、着手なさるがいいさ。

ロパーヒン どう、一杯やらないかね。

トロフィーモフ いや、結構。

ロパーヒン じゃ、こんどはモスクワかね？

トロフィーモフ そう、皆さんを町まで送つて行つて、あしたはモスクワだ。

ロパーヒン なるほど。……まあいいさ、大学の先生はみんな、君の来るまで、講義をせうに待つてらるうからな！

トロフィーモフ よけいなお世話だ。

ロパーヒン 君は一体、大学に何年いるんだね？

トロフィーモフ 何かもつと、新しい手を考えたらどうだい？ その手は古いし、平凡だよ。（オーバーシューズをさがす）ねえ君、僕たちはこれで、おそらく二度と会う時はあるまい。そこで一つ君に、お別れの忠告をさせてもらいたいんだがね——両手を振りまわすな、これさ！ そのぶんぶん振りまわす癖を、ひとつやめるんだね。こんどの別荘建築案にしてもそれだ。やがてその別荘の連中が、だんだん独立した農場主になって行くだろうなんてソロバンをはじくこと——そんな目算を立てることがそもそも、両手を振りまわすことなんだよ。……まあそれはそれとして、僕はやっぱり君が好きだ。君は役者か音楽家にでもありそうな、やさしい華奢きゃしゃな指をしている。そして君の心もちも、根はやさしくて華奢なんだよ。……

ロパーヒン （彼を抱いて）じゃこれでお別れだ、ペーチャ君。いろいろありがとう。もしいるんだったら、道中の費用に少し持って行かんかね。

トロフィーモフ なんだって僕に？ いらないよ。

ロパーヒン だって、ないじゃないか！

トロフィーモフ あるさ。お志はありがとう。ぼくは翻訳料をもらったんだ。ちゃんとこのポケットにある。（心配そうに）しかし、オーバーシューズがないんだ！

ワーリヤ（隣の部屋から）さっさと持つて頂だい、この汚ならしいもの！（ゴムのオーバーシューズを一足、舞台へほうり出す）

トロフィーモフ 何をそう怒るんです、ワーリヤ？ ふん……こりや僕の「オーバーシューズ」じゃない！

ロパーヒン わたしはこの春、ケシを千町歩まいてね、今それで純益が四万あがった。そのケシが咲いた時にや、なんとも言えん眺めながだったよ！ まあそんなわけで、四万もつけたから、それでつまり貸したげようというのさ。できることだから言うのだ。何もそう乙に構えなくてもいいじゃないか？ わたしは百姓だ……ざっくばらんさ。

トロフィーモフ 君の親父おやじが百姓で、僕の親父が薬屋だった、——といったところで、別にどうもこうもありやしない。（ロパーヒン紙入れを取りだす）やめてくれ、やめて。

……たとえ二十万だしたつて、受けとらないから。僕は自由な人間なんだ。君たちみんなが、金持も貧乏人も一様にありがたがつて、へいつくばる物なんか皆、ぼくにとつちやこれっぽっちの権威もない。空中にふわふわしている綿毛も同然さ。僕は、君たちの世話にはならん、君たちがいなくなつて立派にやっけて行ける。僕は強いんだ、誇りがあるんだ。人類は、この地上で達しうる限りの、最高の真実、最高の幸福をめざして進ん

でいる。僕はその最前列にいるんだ！

ロパーヒン　行き着けるかね？

トロフィーモフ　行き着けるとも。（間）自分で行き着くか、さもなけりや、行き着く道をひとに教えてやる。

遠くで、桜の木に斧おのを打ちこむ音がきこえる。

ロパーヒン　じゃ君、ご機嫌きげんよう。もう出かける時刻だ。われわれお互いに、高慢そうな鼻つき合せちやいるけれど、時は遠慮なく、どんどん過ぎて行く。長いあいだつめて、疲れも知らず働いていると、わたしは頭のシコリがとれて、自分がなんのため生きているのか、それがわかるような気がする。それにしても君、このロシアにや、なんのためとも知れず生きている人間が、ずいぶんいるなあ。いや、まあどうでもいい、問題の流サ一一キ一ュ一レ一ィ一ン一ヨ一ン一（訳注　聞きかじりの外来語をもちだしたおかしみ）は、そこにはないのさ。世間のうわさじや、ガーエフさんが職に就いたとかだ。銀行で、年に六千というんだが……。ただ、続きそうもないな、あの不精ぶしょうもんじゃあ……



アーニヤ（ドアの口で）ママのお願いなんだけど、出かけるまでは、庭の木を伐らない  
 てくださいって。

トロフィーモフ ほんとにそうだ、君も気が利かないじゃないか。……（次の間を通過して  
 退場）

ロパーヒン ただ今、ただ今。……なんという奴らだ、まったく。（彼につづいて退場）  
 アーニヤ フィールスを病院へ送ったの？

ヤーシヤ 今朝そう言つとききましたから、送ったものと思われま。

アーニヤ（広間を通過して行くエピソードフに）エピソードフさん、フィールスを病院へ  
 送ったかどうか、ちよつと調べてちようだいな。

ヤーシヤ（ムツとして）今朝エゴールに言つとききましたたら。何を十ペンも訊くこと  
 があるんです！

エピソードフ ご老体のフィールスは、結局ぼくの意見によるとすな、もう修繕が利き  
 ません。先祖代々のところへ行くんですな。僕としては、ただただ羨望せんぼうに堪えんす  
 よ。（トランクを、帽子のボール箱の上へ置いて、つぶしてしまふ）ほらこれだ、つま  
 り結局。どうせそうだろうと思つてたよ。（退場）

ヤーシヤ (あざけるように) 二十二の不仕合せめ……

ワーニヤ (ドアの向うで) フィールスを病院へ送ったの？

アーニヤ 送りました。

ワーリヤ なんだって、ドクトル宛あての手紙を持って行かなかつたんだらう？

アーニヤ それじゃ、追っかけて持たせてやらなけりや…… (退場)

ワーリヤ (隣の部屋から) ヤーシヤはどこ？ おつ母さんがお別れに来てるって、そう

言つてちょうだい。

ヤーシヤ (片手を振る) ちえつ、うんざりさせやがるなあ。

ドウニヤーシヤは、ずっと荷物のまわりであくせくしていたが、今ヤーシヤが一人になつたのを見すまし、そばへ寄る。

ドウニヤーシヤ ちらりと一目ぐらい、見てくれたつていいじやないの、ヤーシヤ。あな  
たは行つてしまうのね……あたしを捨てるのね…… (泣きながら、男の首にすがりつく)  
ヤーシヤ 何を泣くんだ？ (シヤンパンを飲む) 六日すりや、おれはまたパリだ、あし

た特急に乗りこんで、目にもとまらずフツ飛ばすんだ。なんだか本当にできないくらいだ。ヴィーヴ・ラ・フランス（訳注 フランス万歳！）か！ ……ここはどうも性に合わないよ、とても暮して行けない……まあ仕方がないさ。無学な連中も、見あきるほど見たし——もうげんなりだよ。（シャンパンを飲む）なんの泣くことがあるんだね？ 身もちさえよくすりや、泣くことにもならんのだ。

ドウニヤーシャ （懐中鏡を見ながら白粉おしろいをはたく）パリからお便りをくださいね。あたしあんたが、あんなに好きだったんだもの、ヤーシャ、あんなに好きだったんだもの！ あたし華奢な女なのよ、ヤーシャ！

ヤーシャ おい、誰だれか来るぜ。（トランクのそばを、さも忙しそうに立ち回り、小声で鼻は唄なうたをうたう）

ラネーフスカヤ、ガーエフ、アーニヤ、シャルロツタ登場。

ガーエフ そろそろ出かけなくちや。もう幾らもないぞ。（ヤーシャを見て）誰だい、ニシンの臭いにおをぶんぶんさせる奴は？

ラネーフスカヤ 十分ほどしたら、馬車に乗りこみましようね。……（部屋をぐるりと見まわす）さようなら、なつかしい家、うち昔なじみの家の精。おじいさん冬がすぎて春になると、お前はもういなくなる、こわされてしまう。この壁も、いろんなことを見てきたのねえ！

（娘に熱くキスする）わたしの大事なアーニヤ、おまえはキラキラ光っているわ。二つのダイヤモンドのように、お前の眼はめきらめいているわ。嬉しいの？ そんなに？

アーニヤ ええ。とても！ 新しい生活が始まるんですもの、ママ！

ガーエフ （浮き浮きして）まったく、これでやつと万事めでたしき。桜の園の売れちまうまでは、われわれは始終わくわくして、えらい苦勞だったものだが、こうして問題がきっぱり決着して、もうどうもならんとなつてからは、みんな気持が落ちついて、かえつて陽気になつたくらいだ。……わたしは銀行の勤め人で、今やいっぱしの財政家だ……黄玉は真ん中へ、さ。そしてリユーバ、おまえだつて、なんのかのと言うけれど、とにかく血色がよくなつたよ、それは確かだ。

ラネーフスカヤ ええ。神経はだいぶ収まりました、それは本当よ。（召使の手から帽子と外套を受けとる）よく寝られるようになったし。わたしの荷物を運び出しておくれ、ヤーシヤ。もう時間だわ。（アーニヤに）それじゃアーニヤ、近いうちに会いましよう

ね。……わたしはパリへ行って、ヤロスラーヴリのおばあさまが領地を買いもどせと送  
つてくださった、あのお金で暮すつもり——おばあさまも、どうぞお達者でね！——  
でも、あのお金だって、長くはもつまいよ。

アーニヤ ママ、じきに帰ってらっしゃるんでしよう、じきに……ね、そうでしょう？  
わたしは、勉強して、女学校の検定試験をとおって、それから働いて、ママの暮しを助  
けるわ。そうしたらママ、一緒に色んな本を読みましようね。……そうじゃなくて？

(母の両手にキスする) ふたりで、秋の夜長に読みましようね。どつきり読みましよう  
ね。するとわたしたちの前に、新しい、すばらしい世界がひらけるんだわ。……(夢想  
する) ママ、帰ってらしてね……

ラネーフスカヤ 帰って来ますよ、可愛<sup>かわい</sup>いおまえのところへ。(娘を抱きしめる)

ロパーヒン登場。シャルロツタはそつと小曲を歌っている。

ガーエフ シャルロツタはいいなあ、歌なんか歌ってる！

シャルロツタ (くるまれた赤んぼのような格好をした包みをかかえて) わたしの赤ちゃん

ん、ねんねんよう……（オギヤア、オギヤア！ ……という泣き声をする）おお、よし  
よし、いい子、いい子。（オギヤア！ ……オギヤア！ ……）可哀かわいそうに、誰が誰が  
！ （包みを元の場所へ投げだす）だからあなた、お願い、勤め口をさがしてちょうだ  
いよ。これじゃ、どうしようもないわ。

ロパーヒン さがしたげますよ、シャルロツタさん、大丈夫です。

ガーエフ みんな、われわれを捨ててくんだな、ワーリヤも行っちゃもうし……どうもた  
んに、用なしの人間になっちゃった。

シャルロツタ 町にはわたし、住むうちもないし。出てかなきゃならないわ。 ……（小曲  
を口ずさむ）どうせ同じことさ……

ピーシチク登場。

ロパーヒン よう、天然記念物！ ……

ピーシチク （息を切らして）やれやれ、まあ一息つかしてください……へとへとだ。 ……

…皆さん、ご機嫌……。水をいっぱい……

ガーエフ どうせまた金のことだろう？ 桑原桑原、まっぴらご免……（退場）

ピーシチク 久しくごぶさたしましたなあ……奥さん……（ロパーヒンに）君もいたのか  
 ……こいつは嬉しい……よう、天下一の知恵ぶくろ……取ってくれ……まあこれを。…  
 ……（ロパーヒンに金を渡す）四百ルーブリだ……あとまだ八百四十、借りになってるが  
 ……

ロパーヒン （けげんそうに肩をすくめる）こりや夢のようだ。……一体どこで手に入れ  
 たんだね？

ピーシチク まあ待ってくれ……暑い……。前代<sup>ぜんだい</sup>未聞<sup>みもん</sup>の大事件なんだ。わしのところへ  
 イギリス人どもがやって来てね、地面から何か古い粘土を見つけたのさ。……（ラネー  
 フスカヤ夫人に）あなたにも四百……な、天人のような奥さん。……（金をわたす）あ  
 とはまた後ほど。（水を飲む）今しがた、どこかの若い男が汽車の中で話しておったが、  
 なんとかいう……偉大な哲学者は、屋根から飛びおりろ、と勧めておるそうだ……「飛  
 びおりろ！」——それだけのことだ、とな。（仰天したように）こりやどうだ！ 水を  
 一杯！……

ロパーヒン イギリス人って、いったい何者かね？

ピーシチク とにかくその連中に、粘土の出る地面を向う二十四年間、貸したんだ。……  
ところで今は、申しわけないが暇がない……話の先を急ぐんでね。……これから、ズノ  
イコフのところへ行く……それからカルダーモノフのところへもね。……みんな借りが  
あるのさ。……（飲む）ではこれで失礼。……木曜にまた伺います……

ラネーフスカヤ わたしたち、すぐこれから町へ引越して、あしたわたしは外国へ〔発ち  
ますの〕……

ピーシチク なんですと？（そわそわして）なぜまた町へなんぞ？ いや、なるほどこ  
うして見ると、家具だの……トランクだの……。なあに、平気ですよ。……（涙ごえで）  
大丈夫ですよ。……いやどうも、えらい知恵者ですなあ——あのイギリス人というやつ  
は……。なあに大丈夫……。どうぞお仕上げで……。なんでもありませんよ。……神さま  
が助けてくださいますとも……。大丈夫ですよ。……この世のことは何ごととも終りありで  
してな。……（ラネーフスカヤ夫人の手にキスする）もし風の便りにでも、このわたし  
に終りが来たという噂うわさがお耳にはいったら、どうか、このそれ……馬のことを思いだし  
て、「そうそう、昔あのなんとかいいう奴……シメオーノフルピーシチクという男もいた  
っけな……安らかに昇天せんことを」とでも言ってください。……いや、すばらしい上



天気ですなあ。……まったく……（へどもどして退場。が、すぐ引返してきて、ドアのところ）うちのダーシエンカが宜よろしくと申しました！（退場）

ラネーフスカヤ さ、これでもう出かけられる。じつはわたし、奔はつて行くのに、気がかりなことが二つあるの。一つは——病気のフィールス。（時計をのぞいてみて）まだ五分ほどいいわ……

アーニヤ ママ、フィールスはもう病院へやったわ。ヤーシャがけさやったの。

ラネーフスカヤ もう一つの心配は——ワリーヤのこと。あの子は、早起きをして働きつけてるものだから、今じや仕事がなくて、魚が水をはなれたも同然やよ。瘦やせて、顔色が悪くなつて、可哀そうに泣いてばかりいるわ。……（間）あなたはそれを、よくご存じのはずね、ロパーヒンさん。わたしはこう思っていましたの……あの子をあなたのところへとね。それにあなたのほうでも、お見受けするところ、結婚なさりそうな模様でしたものね。（アーニヤに耳うちする。アーニヤはシャルロツタにうなずいて見せ、ふたり退場）あの子はあなたを愛していますし、あなたもあれがまんざらでもなさそうなのに、わからないわ、どうもわからない、なぜあなたがた二人は、おたがい避け合うようなふうをなさるのか。わからないわ！

ロパーヒン わたし自身も、じつはわからないんです。どうも何かこう妙な具合でしてね。  
……まだ時間があるようなら、わたしは今すぐでも結構です。……一気に片をつけて――  
―あがりになります。あなたがいらつしやらなくなると、どうもわたしは、申込みをしそ  
うもありませんよ。

ラネーフスカヤ 願ったりですわ。一分もありや、じゅうぶんですものね。すぐあの子を  
呼びましょう。

ロパーヒン ちょうどシャンパンもあります。（小型グラスをすかして見て）おや、空だ、  
誰かもう飲んじまった。（ヤーシヤ咳せきばら払いをする）がぶ飲みとはこのことだ……

ラネーフスカヤ （いそいそと）結構だわね。わたしたちは向うへ……ヤーシヤ、おいで  
！ いま呼びますからね……（ドアの口へ）ワーリヤ、そこはほつといて、こつちへお  
いで。さ、早く！（ヤーシヤとともに退場）

ロパーヒン （時計をのぞいて）そう……（間）

ドアの向うで忍び笑い、ひそひそ声、やがてワーリヤ登場。

ワーリヤ（長いこと、あれこれと荷物を調べる）おかしいわ、どうしても見つからない  
……

ロパーヒン 何がないんですか？

ワーリヤ 自分でしまいこんだくせに、覚えがないんですの。（間）

ロパーヒン あなたはこれからどうされます、ワルワラ（訳注 ワーリヤの正式の名）  
さん？

ワーリヤ わたし？ ラグーリンのところへ行きます。……あすこの家政を見ることにな  
りましたの……女の家令とでもいうのかしら。

ロパーヒン ではヤーシネヴオ村ですね？ 七十キロもありますよ。（間）いよいよこの  
家の生活もおしまいになりましたね。……

ワーリヤ（荷物を見まわしながら）どこへ行つたんだらう、あれは……もしかすると、  
長持へ入れたのかもしれない。……ええ、この家の生活もおしまいですわ……もう二度  
と返つては来ませんわ……

ロパーヒン わたしはこれからすぐ、ハリコフへ発ちます……この汽車でね。どうも仕事  
が多くてね。この屋敷うちには、エピソードを置いておきます。……あの男を雇つた

のでね。

ワーリヤ あら、そう！

ロパーヒン 去年の今ごろは、もう雪がふつていました。おぼえておいでですか。ところが今は、おだやかで、日が照っています。ただ、寒いには寒いですな。……零下三度ぐらいでしょうな。

ワーリヤ わたし見ませんでした。(間)それに、うちの寒暖計はこわれていますから……

……(間)

戸外の声 (ドアの口で)ロパーヒンさん! ……

ロパーヒン (とうからこの呼び声を待っていたかのように)ああ、今すぐ! (急いで

退場)

ワーリヤは床に坐<sup>すわ</sup>って、衣服の包みに頭をのせ、静かにむせびなく。ドアがあいて、そつとラネーフスカヤ夫人がはいつてくる。

ラネーフスカヤ どうだったの? (間)もう行かなくちや。

ワーリヤ（もう泣きやんでいて、眼をふく）ええ、時間ですわ、ママ。わたし今日のうちに、ラグーリンのところへ着けると思うわ。汽車に乗りおくれさえしなければね……  
ラネーフスカヤ（ドアの口へ）アーニヤ、支度はいいの？

アーニヤ、少しおくれてガーエフ、シャルロツタ登場。ガーエフは頭巾ずきんのついた暖かい外套がいとうを着ている。召使たちや馭者ぎよしやたちが集まる。エピソードは荷物ものの世話をやく。

ラネーフスカヤ さあ、もうこれで発てるわ。

アーニヤ（嬉しうれそうに）出発だわ！

ガーエフ 親愛なる諸君、敬愛おくあたわざる友人諸君！ いま永遠にこの家を去るに臨んで、果して口をつぐんでおられましょうか。告別のため、今わたくしの全幅を領している感慨を、ここに吐露せずにおられましょうか……

アーニヤ（哀願するように）伯父さま！

ワーリヤ 伯父さん、およしなさいったら！

ガーエフ（しよげて）黄玉を空クツションで真ん中へ……。黙るよ。……

トロフィーモフ、つづいてロパーヒン登場。

トロフィーモフ　まだですか、皆さん、もう出発の時間ですよ！

ロパーヒン　エピソードフ、おれの外套を！

ラネーフスカヤ　わたし、もうちよつとだけ坐ってみよう（訳注　旅立ちの前に、しばらく腰をおろす習慣がロシア人にある）。わたしまるで、今まで一度も、この家の壁がどんなだか、天井がどんなだか、見たことがないみたい。今になってやっと、見ても見飽きない気持で、たまらなく懐かしい気持で、眺めるんだわ……

ガーエフ　いまだに覚えてるが、わたしが六つのとき、トロイツァ聖霊降臨の日曜日、わたしがこの窓に腰かけて見ていると、お父さんが教会へ出かけて行ったっけ……

ラネーフスカヤ　荷物はみんな出まして？

ロパーヒン　どうやら、みんなです。（外套を着ながら、エピソードフに）いいかい、エピソードフ、あとは宜しく頼むよ。

エピソードフ（しやがれ声で）ご心配なく、行ってらっしゃいまし。

ロパーヒン 一体どうしたんだ、その声は？

エピソードフ いま水を飲んだ拍子に、何かのみこみましたんで。

ヤーシヤ（軽蔑して）けいべつ間抜けめ！

ラネーフスカヤ わたしたちが行つてしまうと、ここには人っ子ひとり残らないのねえ…

…

ロパーヒン 春が来るまではね。

ワリーヤ（包みから洋傘ようがさを抜きだす。まるで振上げるような格好になる。ロパーヒン、

ぎよつとした身振り）あら、何ですの、どうなすつたの……。わたし、そんなつもりじ

やなかつたのに。

トロフィーモフ 皆さん、さあ乗りこみましょう。……もう時間です！ 間もなく汽車が

はいますよ！

ワリーヤ ペーチヤ、さ、あつたわ、あんたのオーバーシューズ。手提カバンのかげに。

（涙ぐんで）でもあんたの、なんて汚ならしい、おんぼろなの……

トロフィーモフ（オーバーシューズをはきながら）さあ行きましょう、皆さん！ ……

ガーエフ（泣きだしそうになり、ひどくうろたえる）汽車が……その、停車場が……。  
ひねって真ん中へ、白玉は空クツションで隅へ……

ラネーフスカヤ 行きましょう！

ロパーヒン みんなお揃いですね？ 向うには誰もいませんね？（左側のドアに錠をお

ろす）ここには家財が置いてあるので、錠をおろしとかなければね。さあ行きましよう

！……

アーニヤ さようなら、わたしの家！ さようなら、古い生活！

トロフィーモフ ようこそ、新しい生活！……（アーニヤと一緒に退場）

ワリーヤは部屋を一わたり見まわし、ゆつくりと退場。ヤーシヤ、および犬を連れた

シャルロツタも退場。

ロパーヒン では、春まで。さ、行こうじやありませんか、皆さん。……ご機嫌よう！

……（退場）



ラネーフスカヤとガーエフ、ふたりだけ残る。ふたりはそれを待ち兼ねたように、たがいにはと頸くびに抱きつき、人に聞かれぬように声を忍んで、静かにむせび泣く。

ガーエフ（身も世もあらず）ああ妹、可愛い妹……

ラネーフスカヤ ああ、わたしのいとしい、なつかしい、美しい庭！ ……わたしの生活、

わたしの青春、わたしの幸福、さようなら！ ……さようなら！ ……

アーニヤの声（浮き浮きと、招き寄せるような声で）ママ！ ……

トロフィーモフの声（浮き浮きと、感激をこめて）おーい！ ……

ラネーフスカヤ お名残りにもう一度、壁を見て、窓をながめて……。亡なくなったお母さ

まは、この部屋を歩くのが好きだったわ。 ……

ガーエフ ああ妹、可愛い妹！ ……

アーニヤの声 ママ！ ……

トロフィーモフの声 おーい！ ……

ラネーフスカヤ いま行きますよ！（ふたり退場）

舞台からになる。方々のドアに錠をおろす音がして、やがて馬車が数台出て行く音がきこえる。ひっそりとする。その静けさのなかに、木を伐る斧おののぶい音が、さびしく物悲しくひびきわたる。

足音がきこえる。右手のドアから、フィールスが現われる。ふだんのとおり、背広に白チヨツキをつけ、足には室内ばきを穿はいている。病気なのである。

フィールス（ドアに近づいて、把手とってにさわってみる）錠がおりている。行ってしまったんだな。……（ソファに腰をおろす）わしのことを忘れていったな。……なあに、いいさ……まあ、こうして坐まつていよう。……だが旦那だんなさまは、どうやら毛皮外套シユールバも召さずに、ただの外套でいらしたらしい。……（心配そうな溜息ためいき）わしの目が、つい届かなかったもんでな。……ほんとに若わかえお人というものは！（何やらぶつぶつ言うが、聞きとれない）一生が過ぎてしまった、まるで生きた覚えがないくらいだ。……（横になる）どれ、ひとつ横になるか。……ええ、なんてぎまだ、精も根もありやしねえ、もぬけのからだ。……ええ、この……出来そこねえめが！……（横になったまま、身じろぎもしない）

はるか遠くで、まるで天から響いたような物音がする。それは弦つるの切れた音で、しだいに悲しげに消えてゆく。ふたたび静寂。そして遠く庭のほうで、木に斧を打ちこむ音だけがきこえる。

—幕—



## 青空文庫情報

底本：「桜の園・三人姉妹」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年8月30日発行

1990（平成2）年8月20日47刷改版

2000（平成12）年3月15日82刷発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）と「≫」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

※二重ハイフンは、「＝」（等号、1-65）で入力しました。

入力：大野晋

校正：鈴木厚司

2010年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 桜の園

——喜劇 四幕——

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>